

第Ⅲ章 総括

第1節 主要遺構の変遷

1. 主要遺構の時期区分とその特徴

第2・3期調査で検出した主要遺構は、15世紀から19世紀にかけての区画溝・堀、井戸、土坑（土器廃棄土坑を含む）、掘立柱建物・柱列などである。

遺構の区分については、遺構の関連や出土遺物の時期、歴史的な画期を軸として6つの時期に分けた（第7表）。時期区分ごとに、それぞれの年代と区分の基準、区分ごとに歴史的事実と主要遺構との関連をまとめる。

①②第1期（15世紀～16世紀前半）／富山郷期

「富山郷」の初見史料である『吉見詮頼寄進状』（応永5（1398）年）以降の15世紀代を第1-①期とした。また16世紀初頭から、1543年頃の神保長職による富山城築城までを第1-②期とした。歴史区分で室町時代後期～戦国時代前期にあたる。

①第1-①期（15世紀）の主要遺構として、2-SD70、2-SD205、2-SD586（古）、4-SD47、4-SD57等の溝・区画溝、2-SE1175、3-SE77、4-SE44、4-SE78、4-SE101等の井戸がある。

2-SD70の中程に堆積した炭化物層のAMS年代測定の結果、西暦1423-1440年という年代が出ており、溝の開削はAMS年代より早い『吉見詮頼寄進状』が書かれた頃と推測される。2-SD70と直交する2-SD205、2-SD70と併行して延びる2-SD586（古）、2-SD540、やや離れるが4-SD47、4-SD57も一連の時期の遺構と考えられる。これらの溝・区画溝は、真北から11°前後東側に傾斜する角度（N-10～12°-E）もしくは直交する角度（N-78～80°-W）の軸方向を持つものが多く、当該期にこれらの区画溝等に囲まれた居住城等を区画、構築したと考えられる。その後の戦国時代・江戸時代の堀や溝もN-10～12°-Eの軸方向を持つことから、「富山郷」に条里地割が施工され、その後踏襲されたと推測される。「富山郷」および条里制については、「第3節 中世荘園「富山郷」について」で詳述した。

また、2-SE1175、3-SE77、4-SE44等の同時期の素掘井戸・石組井戸が点在し、その周辺一帯に多くの遺構が検出されていることから、広範囲に集落が拡がっていた可能性が高い。しかし、近世以降整地が何度も行われたことが調査で確認でき、その際に比較的浅い遺構を中心に削平されたため当該期の遺構は深い溝や井戸以外は消滅してしまったと考えられる。

②第1-②期（15世紀末～16世紀前半）の主要遺構として、2-SD470（古）、2-SD471、2-SD510、2-SD640、2-SD1127（古）、3-SD54（古）等の溝・区画溝、2-SE47、2-SE417、2-SE939、2-SE947、3-SE121等の井戸、2-SK705、2-SK710等のかわらけ廃棄土坑などがある。第1-①期と比較して、主要遺構が2区調査区2-SD470以南、中央付近に集約される傾向がみられる。

平成20・21年度に実施した路面電車の付帯工事に伴う立会調査において、8地点で堀の北肩部、10地点で深さ1.5m以上の堀を検出している〔富山市路電推進室・富山市教委2009〕。この堀は、2-SD470の東延長線上にあることから、2-SD470（古）と同一の堀と推測される。堀の規模は、2-SD470（古）西端から10地点までの距離が約165mを測り、1町半以上の居館の堀であったと考えられる。

③第2期（16世紀中頃～17世紀初頭）／中世富山城期

1543年頃の神保長職による富山城築城から慶長期富山城築城までの期間である。中世富山城は、神保から上杉、神保、佐々、前田へと城主が絶え間なく交代する。城主の交代に伴って、堀・区画溝や井戸等も構築と廃絶が行われた可能性が高い。

当該期の遺構として、調査区南北端に位置する2-SD481と4-SD1等の堀、3-SD54（新）とそれに連結する3-SD123および2-SD633、2-SD700（古）等の溝・区画溝、2-SE414、2-SE416、2-SE480

等の井戸、2-SK538・539、2-SK607等のかわらけ廃棄土坑などがある。

以下では、それぞれの遺構の時期を細分して考察する。

16世紀中頃の遺構として、2-SE409、3-SD43、4-SD1等がある。調査区北端に位置する堀4-SD1最下層埋土は、火災よって生じた焼土・炭化物などが多量に含まれており、炭化物のAMS年代測定の結果、西暦1552-1601年という年代が出ている。このことから、1560（永禄3）年の上杉氏侵攻や1572（元亀3）年～1573（天正元）年の一向宗と上杉氏の争い等によって生じた戦火の痕跡である可能性が高く、神保氏によって構築された中世富山城の堀であると考えられる。

この時期の遺構は、中世土師器皿を中心、一括性の高い多量の遺物を伴う物が多い。なかでも調査区北端に位置する区画溝3-SD54（新）、南東に位置する2-SK538・539等からは多量の中世土師器皿が出土する。3-SD54に連結し、南北に調査区を縦断する区画溝3-SD123・2-SD633については、南側延長上有る2-SD70と重複関係ないことから、2-SD470と連結し、3-SD54を北端とし、2区北側に居住区を区画する可能性が高い。

調査区南端に位置する大型の堀2-SD481に関しては、文献史料に記録されている、佐々成政による1580年代前半の富山城改修で掘削されたと推測される。（1）遺物の大部分が16世紀後半～末のものであること、（2）埋土の堆積状況が一度に人為的に埋められた痕跡を残していること、（3）約8m南側に慶長期富山城外堀1-SD04が1605年に開削されたことに加え、その北側には土塁が構築されたことが絵図『越中国富山古城之図』で確認できること、などから、同時に存在した堀の可能性が極めて低い。以上のことから、慶長期富山城外堀開削に伴い埋められたと考えられる、極めて短い期間に機能した堀である。

④第3期（17世紀初頭～17世紀中頃）：近世富山城期（前）

1605（慶長10）年の前田利長による慶長期富山城整備から1661（寛文元）年の富山城改修までの期間である。慶長期富山城は1605年に整備された後、1609年の大火で焼失し、1615（元和元）年の一国一城令により廃城となる。廃城後、1639（寛永16）年の富山藩成立し、その翌年に前田利次が仮城として加賀藩より借城した。1647（正保4）年に加賀藩が幕府に提出した絵図の写しで、慶長期富山城を描いた絵図である『越中国富山古城之図』では、三ノ丸には侍屋敷（侍屋舎）があるが、本調査区は空地であり、用途は記されていない。そのため、この時期までの間に構築された遺構については、絵図として確認できない。1605年の整備時の遺構として、慶長期富山城の外堀1-SD04があり、今回の調査では2-SD472、2-SD1127（新）、2-SD470（新）とその延長4-SD52、2-SD500、2-SD700（新）、2-SD300とその延長4-SD58、等の溝・区画溝、井戸2-SE414等を17世紀前半の遺構として検出した。1609年の大火による富山城廃棄から1640年の前田利次の仮城入城までは活発な活動は行われなかつた可能性が高いこと、この時期の遺構から出土した遺物の時期が17世紀初頭～前期のものが主体であること等から、これらの遺構が構築され、機能した時期は17世紀初頭、埋め戻された時期は富山藩の成立と百塚新城築城廃案・富山城改修に決定した17世紀前半に行われた可能性が高い。

⑤第4期（17世紀中頃～18世紀前半）：近世富山城期（中）

1661年の富山城改修から18世紀前半に調査区北半で実施される大規模な整地までの期間である。江戸時代前期～中期にあたる時期で、前後2つの二期が想定できる。

最初の二期は1661年の富山城の改修である。当該調査区内でも屋敷地の区画の再整備に伴う不要な堀・区画溝等の埋め戻しなどが行われた可能性が高く、近世富山城外堀1-SD04の拡張工事もこの時期に行われた。1663～1666年頃に作図された『万治年間富山旧市街図』は、1661年の改修後の富山城を描いたとされ、本調査区周辺には、大手門側から村勘左衛門、今枝彦衛、久保喜庵、吉田長次郎、磯野次郎八、浅尾主膳の北に、富田図書、奥村藏人の名が見える。1675（延宝3）年の大火（細野焼）に関する記述がある『吉川隨筆・前田氏家乘』には「延宝三乙卯年・・・（中略）・・・三

の御丸へ火飛戸田七郎兵衛奥津里庵不破頼母御厩村隼人今枝彦兵衛加藤左門磯野織部浅尾藤大夫富田継殿奥村藏人・・・(中略)・・・焼失風四方より吹廻し候故及大火候事』とあり、久保・吉田の両屋敷が加藤屋敷に替わった以外は絵図と一致する苗字の家臣が記述されており、本調査区周辺が大火で焼失したことが分かる。このことから、この時期の堀や区画溝、大型土坑等には、埋土中に、焼土や炭化物、二次被熱を受けた遺物が混じる層が確認できる可能性が高く、特に富田屋敷と吉田屋敷(後に加藤屋敷)の屋敷境構と考えられる4-SD60にはその痕跡が確認できる。また、17世紀後半の遺構には2-SD123(新)、2-SD586(新)、井戸2-SE499等がある。宝永2(1705)年の城下の状況を描いたとされる『富山市街古圖』には、18世紀初頭には調査区範囲に御厩があったことがわかり、御厩が1675年の大火後に大手門東から移設されたとすれば、2-SD123(新)、2-SD586(新)が御厩を囲む境界溝であった可能性がある。

2度目の画期は18世紀前半で、この時期の主要な遺構として、2-SE564、2-SE592等の井戸、2-SK1000、4-SK42等の廃棄土坑、2-凹地、4-SX40などの整地層がある。旧堀・区画溝の埋め戻し跡や凹地状になっていた土地を中心に整地を実施したと考えられる(凹地:2-SK1168、2-SK1194、2-SK1273、4-SX40)。廃棄土坑である2-SK1000、4-SK42に関しては、いずれも多寡はあるものの焼土と炭化物が相当量含まれた埋土とともに、越中瀬戸素焼皿を中心とした土器陶磁器がまとめて廃棄されており、大火により生じた廃棄物をまとめて埋めた可能性が高い。また、『万治年間富山旧市街図』と『富山市街古圖』を比較すると、富田・吉田・磯野屋敷→近藤屋敷、今枝屋敷→御厩、浅尾屋敷→○田屋敷、奥村屋敷→小塚屋敷となっており、大規模な地盤整備が行われた時期に屋敷替が行われた可能性が指摘できる。

第4期前半以降、今回調査区は全域が近世富山城三ノ丸の南西に位置する重臣の屋敷地であり、区画溝は、主に重臣屋敷の屋敷境に位置づけられる。また屋敷境の区画溝の中には、室町時代後期、富山郷の区画溝と同一軸方向・同位置に重複して開削されているところもあり、江戸時代も「富山郷」に施工した条里地割を踏襲した事が確認できる。

⑥第5期(18世紀後半～19世紀前半):近世富山城期(後)

江戸時代後期に相当し、1789年の洪水、1808年の富山城浸水、1831年の大火(濱田焼)等の記録が残る。この時期の遺構として、2区南東に馬屋の痕跡と考えられる幅6m、長さ16m以上を測る大型土坑2-SX125と、その西側に伴う柵列2-SA1410がある。幕末期の絵図『越中富山御城下絵図』でも馬場と描かれており、『富山市街古圖』が描かれた18世紀初頭から幕末まで同じ場所に御厩があったと考えられる。また4区には火事対策として築造された防火水槽としての水溜状遺構4-SX3・4と、1789年の洪水による埋没後に縮小再構築された4-SX3、導水路として一連の施設として構築された石組水路4-SD13などがある。水溜状遺構の詳細については、総括「第5節 水溜状遺構について」に詳述した。この時期の井戸は2-SE592、2-SE564(新)がある。

2区北側中央で、明治期の廃棄土坑2-SK451を検出した。大量の近代陶磁器、下駄等の木製品とともに、表「富山地方裁判所局御中」裏「大阪控訴院検事局」の記載のある木札、「富山地方裁判所」の線刻がある硯が出土しており、明治に三ノ丸跡地に富山地方裁判所が設置されたことを裏付ける。

この他、19世紀以降の遺構として、4区北部と南西部で竹製導水管を埋設した近代の上水施設を検出した。

2.まとめ

第2・3期調査によって、主に下記の事項について判明した。

- ①区画溝や堀・大型土坑・井戸等に伴う遺物や遺構の重複関係および自然科学分析結果等により、室町時代から江戸時代末期にかけて、当地に中世富山城や近世富山城が築城される以前から連続と

生活が営まれていたことが判明した。遺構の時期として主に15世紀、15世紀末～16世紀前半、16世紀中頃～16世紀末、17世紀初頭～中頃、17世紀後半～18世紀前半、18世紀後半～19世紀初頭の6期に分けられる。17世紀初頭～中頃は、1609年の大火に伴う富山城廃棄と1661年の富山城改修に挟まれる時期で、活発な活動が行われなかつたと考えられたが、1639年の富山藩成立と翌年の前田利次入城を期に構築されたと考えられる同時期の遺物を伴う区画溝や井戸等の遺構を一定量検出した。

②近世富山城の区画溝と重複する室町時代（15世紀前半）の区画溝を検出した。このことから、室町時代から江戸時代にかけて、基本的にN-10°～12°-Eと、それと直交するN-78°～80°-Wという、同一の方向軸／条里地割を使用していたことが判明した。

③2-SD470（古）は①の条里割で構築された15世紀末～16世紀前半の堀で、同一の堀と考えられる遺構が、約165m離れた場所の調査でも検出している〔富山市路電推進室・富山市教委2009〕。このことから、1543年頃の神保長職による富山城築城以前にも、1町半以上の敷地を持つ居館／拠点集落が存在したことが判明した。

④2区調査区南端で検出した2-SD481は幅約12mを測る大規模な堀である。遺構の位置、出土遺物や文献史料から、佐々成政による1580年代前半の富山城改修で掘削された可能性が高いもので、調査区で検出した形状から、堀の南東端付近の部分と考えられる。当遺構から約140m北西に離れた場所で行われた調査でも、延長部分と考えられる遺構が検出されており、佐々期の富山城の規模の一部をうかがい知ることができた。

⑤4区北端で検出した大型の堀4-SD1は、遺構に伴う遺物から16世紀中頃、神保長職による中世富山城築城に伴い構築され、機能したと考えられる。一方で、江戸時代前期の慶長期富山城と描いたとされる『越中国富山古城之図』には描かれていない堀であり、慶長期富山城が築城されるまでには埋没していたと考えられる。この遺構は、戦国時代に構築・機能したのち、一度埋没した後、17世紀後半の富山城改修時に4-SD60が再開削された。4-SD60は、出土遺物から17世紀後半～18世紀前半の遺構と考えられる。この溝は、寛文の改修後の絵図とされる『万治年間富山旧市街図』から富田屋敷と吉田屋敷の屋敷境の可能性が高い。18世紀前半の整地4-SX40で4-SD1および4-SD60の遺構上部が削平される。

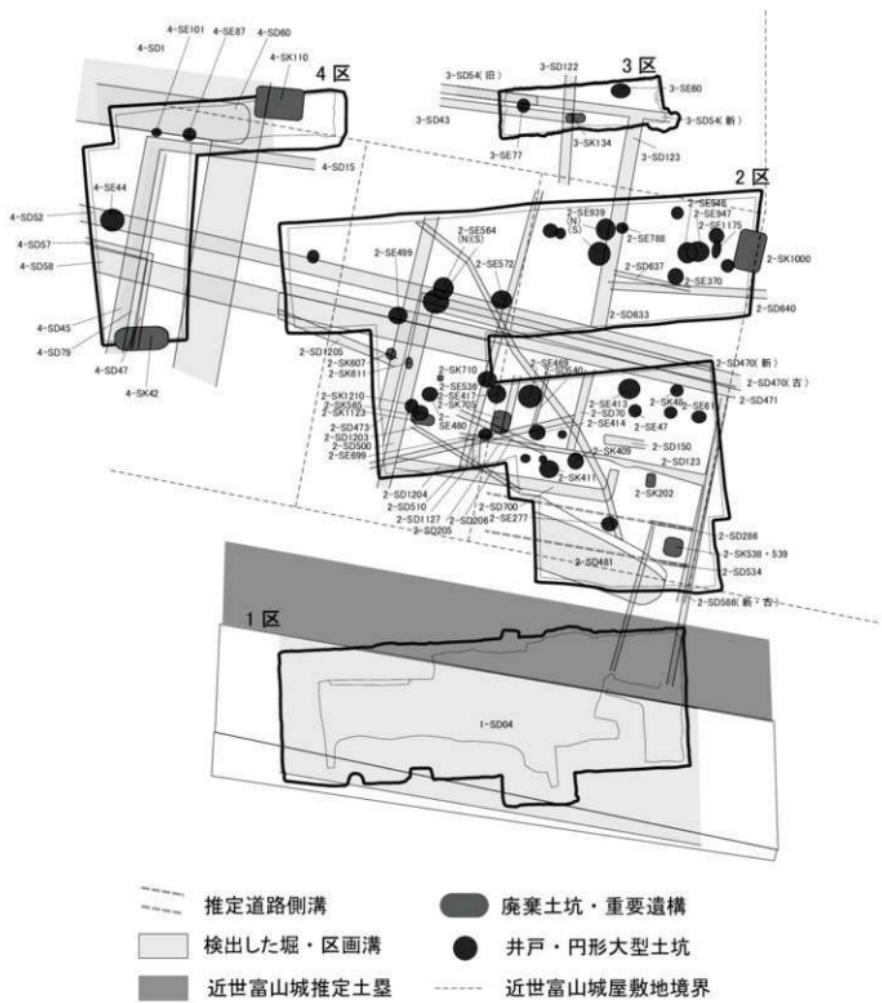
⑥江戸時代後期、18世紀後半に構築され、火事対策に貯水施設として利用したと考えられる大型の石組遺構（水溜状遺構）を3基検出した。文献資料でも、季節風に伴う大火などによる富山城・城下町の焼失が記録されており、金沢城でも同様の遺構が検出されていることからも、江戸時代の火事対策に伴う施設として城内にも構築されたことが判明した。

（朝田）

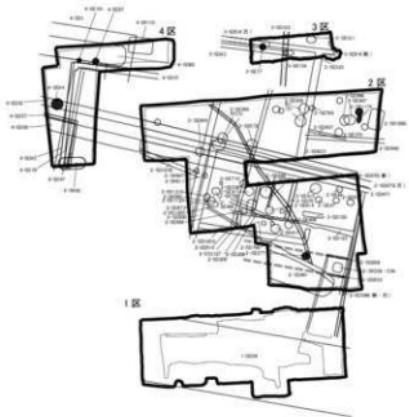
第7表 主要遺構変遷表

遺構時期			1区	2区(2区遺構のみ“-”を省略)				3区	4区		
① 15世紀	前半 室町時代中期	I-SD26	SD776	SD655			SE277 SD206	3-SD122	4-SD47・57 4-SE44 4-SE87 4-SE101		
	後半 1467年:応仁の乱 戦国時代		SD286 SD534				3-SE77	4-SD15・79			
	初頭 1543年頃:中世富山城築城(神保長綱) 1560年~:上杉支配下	SD470古 SD640 SD1127古 SE479 SE947 SK705 SK710	SD471	SD637	SE469 SE939	SE409	SD150 SD61 SE370	3-SK34 3-SD54古 3-SK134 3-SE121	4-SD51 4-SK92 4-SK110		
② 16世紀	前半 1573年:安土桃山時代 /1578年~:神保・1582年~:佐々成政(改修) 1585年:破却		SD473 SD510	SD633 (~後半)	SE409	SD123古 SD700古 SE414 SE416 SK48 SK538・539 SK607	3-SD43 3-SK3	3-SD54新 3-SD123 3-SK60	4-SD51 4-SK92 4-SK110		
	中項 1596~1615年:慶長期 1603年:江戸時代 1609年:富山城大火→富山城廢棄	SD481	SE480	SD470新 SD500	SK141 SK142	SK141 SK142	SD123新 SD596新 SE788	3-SD39 3-SK71	4-SD45・70 4-SD1		
③ 17世紀	前半 1639年:富山藩成立 1640年:前田利次仮城入城		SD472 SD1127新	SE413 SE536	SK611	SK611	SD123新 SD596新 SE788	3-SD43 3-SK3	4-SD52		
	末 1714年:本丸御殿焼失	SD300	SD700新						4-SD58		
④ 18世紀	前半 1661年:富山城改修 1675年:富山城大火 三ノ九延焼	I-SD04古	SE499 SK656		SK1000	面地 (整地層)	SE371 SE417 SE592	SE564新 SK202	4-SD60 4-SK42 4-SX40 (整地層)		
	中項 1789年:洪水								4-SX3・4		
⑤ 19世紀	後半 1808年:富山城浸水	I-SD04新							4-SX3 4-SD13		
									4-SX5		
	初頭 1831年:大火(濱田焼)										

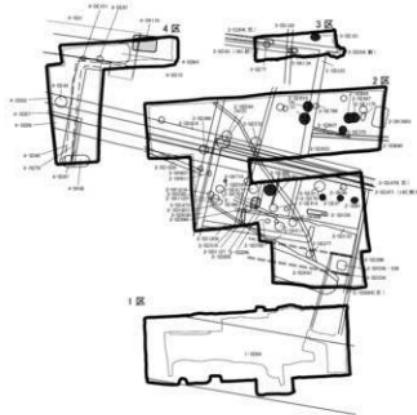
＊時期不明重要遺構:2-SE699



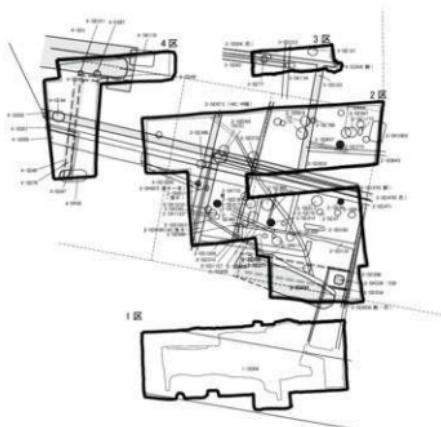
第185図 主要遺構全体概略図



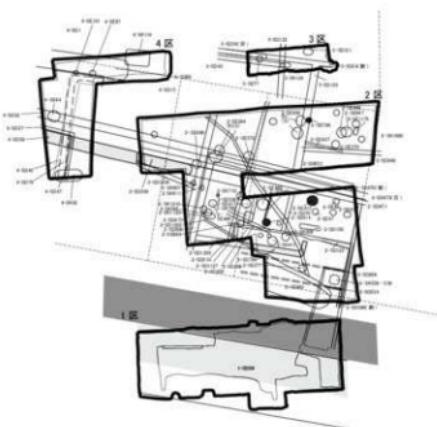
①15世紀



②16世紀初～前半

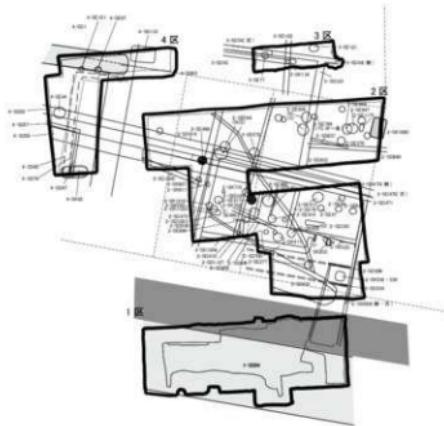


③16世紀中頃～16世紀末

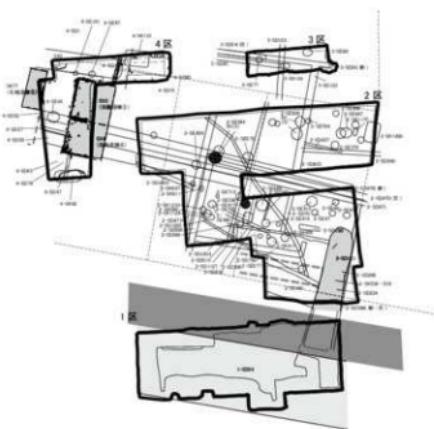


④17世紀前半～中頃

第186図 主要遺構時代変遷概略図（1）



⑤17世紀後半～18世紀前半



⑥18世紀後半～

第2節 富山城跡第2・3期調査出土遺物について

1. 出土遺物の概要

第2・3期調査で検出した遺構・遺物は、主に中近世、15世紀から18世紀にかけてのものである。出土遺物の主体をなすのは、中近世を通して土器・陶磁器類であるが、それ以外にも取鍋・鉄滓・磚等の土製品や土人形・銅錢・簪などの金属製品、硯・砥石・石鍋・石臼・板碑・五輪塔・宝篋印塔・石垣石材等の石製品・石造物・石材、漆器・箸・下駄・結桶・木札等の木製品が出土している。このうち土器・陶磁器は中型コンテナで約350箱出土している。内訳では、中世は中世土師器皿、近世は越中瀬戸の素焼皿などの在地産の皿類が出土個体数の大半を占める。壺・甕・擂鉢などの貯蔵・調理具は、中世は越前が比較的多い反面、珠洲が少なく、八尾はみられない。近世は越中瀬戸が最も多いため、遠隔地である唐津・備前系の擂鉢等も一定量搬入している。また食膳具として、中世は青磁・白磁等中国陶磁、瀬戸美濃など施釉陶器が、近世は景徳鎮・漳州窯等の中国製磁器（染付）、京・信楽系陶器、唐津・伊万里・肥前系陶磁器、備前等が出土した。特に整地層である4-SX40からは、多量の伊万里が出土した。これら以外の特筆すべき遺物として、大名クラスの支配層で使用される、極めて出土事例の少ない中世の中国青白磁の梅瓶（＊中名V遺跡B4S地区SD3550／13世紀前半の遺構で体部片出土）が出土したことが挙げられる。

今回抽出した資料は、重要な土坑・溝（区画溝・堀）・井戸等の遺構から出土した資料を中心とし、遺構の時期との整合性が低い混入とみられる遺物については除外した。

考察に関しては、出土量が圧倒的に多い中近世土師器皿、越中瀬戸素焼皿を基軸に、珠洲、越前等近隣の瓷器系陶器、瀬戸美濃、越中瀬戸、中国陶磁、京・信楽系、唐津・伊万里等肥前系陶磁器などの一定量の出土量が確認でき、かつ、時期が比較的明確な試料を重視した。このうち、主要遺構遺物については產地数量比率及び器種別構成比率（食膳具・調理具・貯蔵具）を算出・数値化することで、遺構の時期・種類と多用されている主要土器陶磁器との関連性と変化についても考察した。計量に際しては、基本的に口縁部計測法・底部計測法を併用したが、擂鉢等計測数量に大きな誤差が生じると考えられる一部の遺物に関しては個体識別法も併用した。但し、產地構成率に関しては、日常雑器のうち比較的出土数の多い碗・皿等供膳具のみとし、出土数が少なく1点の差が大きく生じる擂鉢・壺・甕等は考察から除外し、時期・時代によって生じた大きな流れについてのみふれる程度とした。遺物種類ごとの出土比率・編年の位置付けについては、残存率の高い遺物を実測対象としていることから、これらの遺物の観察結果を中心とした。

2. 主要遺構から出土した土器陶磁器の組成

ここでは、前述した主要遺構から出土した土器陶磁器の產地別構成比率・器種別構成比率を算出し、時代推移に伴う使用割合の変遷を数値化した（表1）。以下に、構成比率を算出した主要遺構毎に詳細を述べる。なお出土遺物の99%以上が中世土師器と、明らかに比率が偏り多様性に欠ける2-SK538・539や2-SK705などの中世のかわらけ廐棄土坑については残存率計測の数量検討対象から除外し、残存率が高く実測対象とした遺物の傾向から検討した。

以下では主要遺構の位置や時期、性質と出土遺物について述べる。残存率計測は、2-SD481、2-SD640、2-SK1000、4-SD1、4-SD60、4-SX40、4-SK42、2-SK202を検討対象とした。供膳具に関しては中・近世土師器・瀬戸美濃・中国陶磁・越中瀬戸・唐津・伊万里・京・信楽系を、調理具は珠洲・越中瀬戸・越前・備前系を含むその他のもの、貯蔵具は珠洲・越中瀬戸・越前、その他のものに分類し、数量確認対象としたが、調理具・貯蔵具は数量が少ないので、比率はあくまで参考である。

2-SD70（15世紀前半～後半：室町時代区画溝）

2区中央に位置する区画溝である。当該期の遺構として、ほぼ同一軸方向に延びる2-SD586（古）、

2-SD473（古）、直交する2-SD205等が挙げられる。遺構の時期の遺物として中世土師器、奈良火鉢が出土した。奈良火鉢（1596）が出土した埋土中央に堆積する焼土・炭化物層から採取した炭のAMS年代測定の結果、15世紀前半～中頃の結果が出ており、開削～埋没時期を含め、15世紀に納まる可能性が高い。後世の搅乱による混入を除いた同時期の遺物は中国龍泉窯系青磁碗（15世紀前半）1点、奈良火鉢を除くと、中世土師器皿（1～19）が出土した。中世土師器皿の内、残存率の高いものから優先して実測した19点中、堀内器種分類A類が8点、B類が1点、C類が5点のほか、能登系が5点を占める。この時期の土師器が一定量出土した遺構として、2-SE1175、2-SK1123、3-SD54、3-SK60、3-SE77等が挙げられる。

2-SD640（16世紀前半：戦国時代区画溝）

2区北東に位置する区画溝である。遺物は数点の越前の甕・擂鉢（824・825）を除くと、中世土師器皿（101～117）のみ出土した。埋土がほぼ単層で、廃棄時に入為的に埋められことから、遺物の年代は16世紀前半である。実測遺物では、中世土師器皿は堀内器種分類A類が75.5%、C類が23.5%出土した。

3-SD54（16世紀中頃～後半：戦国時代区画溝）

3区を東西に横断する区画溝である。ほぼ直交する同規模の区画溝3-SD123が南側に延び、約13～14m南に位置する2-SD633と連結し、この時期の居住城を区画する可能性が高い。100点を超える完形・ほぼ完形のものを含んだ中世土師器200点以上が遺構全域に広がって出土し、その中には明らかに供膳具として使用された口径約14cm～18.8cmを測る大型・超大型の京都系土師器皿が25%以上確認できた。これらと、出土点数の50%を超える、主に口縁端部に煤・油煙痕が付着する口径8～12cmの小・中型の灯明皿が混在する。このほか珠洲壺（813）および16世紀後半～末の越前擂鉢（847・848）が少量出土した。

4-SD1（16世紀後半：戦国時代堀）

4区北端に位置する堀である。炭化物・焼土が多量に含まれた最下層埋土から炭を抽出し、AMSによる年代測定の結果は16世紀後半であった。17世紀後半の区画溝である4-SD60、18世紀前半の整地層4-SX40と完全に重複し削平関係にあるため、統計した遺物数量に、混入による影響は否めない。これについては4-SD60、4-SX40も同様である。遺物は須恵器、中世土師器、珠洲、越前、瀬戸美濃、中国染付、越中瀬戸、土師質土器、唐津、伊万里が出土した。供膳具として中世土師器皿が62%、伊万里が13%、唐津が12%、青磁・白磁などの中国陶磁が8%、瀬戸美濃が5%出土している。ただし、伊万里・唐津は遺構全域で重複する4-SD60、4-SX40の遺物の混入の可能性が高い。当遺構の埋土の大部分は、火災に伴う埋め立てによるものと考えられ、焼土・炭化物が多量に含まれる。そのため、遺物も二次被熱しているものが多い。

2-SD481（16世紀後半～17世紀初：戦国時代堀）

2区南端に位置する16世紀後半に機能した堀である。慶長期富山城外堀と、古絵図にみられる土塁推定地との位置的な関係上、前田利長が外堀の開削に着手する慶長10（1605）年には、埋立てにより完全に埋没していた可能性が高い。遺構の時期と整合性の高い遺物として考えられるものとして、供膳具は中世土師器・瀬戸美濃（1092～1096）・中国陶磁（1174）・初期唐津や古伊万里が、貯蔵具・調理具として越前（1217・1218）が出土した。旧河道を利用した堀であることから、より古い時期の遺物の混入の可能性と、埋立てに起因する地盤の沈下と整地再盛土により新しい時期の遺物の混入が生じる可能性がある。実測対象外も含めると、出土した遺物は中世土師器・瀬戸美濃、志野、越前、信楽、中国染付、越中瀬戸、唐津、近世陶器等の土器陶磁器、漆器椀、箸、円形板などの木製品で

ある。供膳具として、数量的に大部分が中世土師器皿で、全遺物の64%を占める。16世紀後半～末のものを中心とし、堀内分類A類が73%、C類が27%を占める。なおD類は16世紀前半のもの（64）のみ出土しており、16世紀後半の能登系の搬入は確認できない。貯蔵具として、越前が42.8%、唐津・信楽が各23.8%、越中瀬戸施釉が9.6%出土している。なお信楽の貯蔵具は、当遺構でのみ出土している。

4-SD60（17世紀後半：江戸時代前期区画溝）

4区北端に位置する区画溝である。16世紀後半の堀4-SD1を削平し、18世紀前半の整地層4-SX40に上部構造を完全に削平される。土器陶磁器は、近世土師器、越前、越中瀬戸、漳州窯染付を中心とした中国陶磁器、唐津、伊万里等が出土した。このうち近世土師器皿が33%、越中瀬戸素焼皿が31%、越中瀬戸施釉が16%、伊万里が7%、唐津が5%、瀬戸美濃が4%、京・信楽系および中国陶磁が2%を占める。

2-SK1000（18世紀前半：遺物廃棄土坑）

2区北東に位置する廃棄土坑である。酒宴に伴うと考えられる。遺物は越中瀬戸、伊万里、近世陶器が出土した。供膳具全体の82%が越中瀬戸素焼皿を占め、その他、近世土師器皿が4%、伊万里が8%、瀬戸美濃が4%、越中瀬戸施釉・唐津が1%である。ほぼ同時期の富山城下町遺跡や、4-SX40・4-SK42などの出土事例から、同時期の陶器系の供膳具が唐津・瀬戸美濃とともに京・信楽系が一定の割合を占められるのに対し、当遺構からは出土していない。

4-SX40（18世紀前半：江戸時代整地層）

4区北端に位置する整地層である。16世紀後半の堀4-SD1および17世紀後半の区画溝4-SD60の上部構造を完全に削平する。土器陶磁器は近世土師器、越中瀬戸、唐津、伊万里、瓦器、火鉢等が出土した。このうち供膳具は伊万里が54%、京・信楽系が14%、越中瀬戸素焼皿が13%、唐津が12%、近世土師器皿が3%、越中瀬戸施釉・瀬戸美濃が各2%を占める。また、18世紀後半を中心として流通した肥前の陶胎染付の碗が一定量出土している。

4-SK42（18世紀：江戸時代中期廃棄土坑）

4区南端に位置する廃棄土坑である。遺物は瀬戸美濃、中国白磁・青磁、越中瀬戸、唐津、伊万里、近世陶器が出土した。遺物は近世土師皿が46%、越中瀬戸素焼皿が47%出土しており、前者は17世紀後半の、後者は17世紀後半～18世紀前半のものを中心とする。このほか瀬戸美濃、京・信楽系が各2%、伊万里・唐津、中国陶磁器が各1%出土している。越中瀬戸素焼皿の中で、17世紀後半特有の調整と考えられる底部にケズリ調整を施したもののが含まれるが、多くは18世紀前半以降にみられる小型のものである。

3.まとめ

第2・3期調査によって、遺物について、主に下記の事項について判明した。

- ①15世紀の室町時代から江戸時代後期の19世紀前半まで連綿と営みが継続しており、それぞれの時期の出土遺物の特色が調査結果に明確にあらわれた。
- ②北陸の中世の調理具・貯蔵具を代表する珠洲がほとんど出土しないことから、調査区内における中世富山郷の時期の集落規模は小さく、拡大したのは珠洲が衰退する16世紀以降である。
- ③中世土師器皿は在地系・京都系とともに15世紀後半には能登系が一定量みられる。口径13cm以上の中～大型を中心とする京都系は供膳具であり、炭化物・油煙痕の付着はほとんどみられない。小型～中型の中世土師器皿のほとんどには油煙痕・炭化物が付着したものが多く主な用途は灯明

皿であり、越中瀬戸素焼皿の中で、17世紀後半特有の調整と考えられる底部にケズリ調整を施したもののが含まれるが、多くは18世紀前半以降にみられる小型のものである。16世紀末に越中瀬戸窯が開業した後、17世紀中頃以降の越中瀬戸素焼皿の生産・流通量の拡大とともに漸減していく。

- ④中国製陶磁器は白磁および龍泉窯系青磁は14世紀～15世紀のものがみられるほか、大名クラスの支配層にのみ用いられたと考えられている青白磁の梅瓶が出土した。

また16世紀末以降、景德鎮系の染付皿とともに、漳州窯染付が一定量出土する。漳州窯染付は16世紀末～17世紀中頃に輸入され流通した粗製の染付で、皿・碗などとともに大型の盤が比較的多く確認できた。輸入が停止した17世紀後半～18世紀の遺構からも出土している大皿もあるが、これらは伝世したと考えられる。

- ⑤17世紀初頃に全国的に流行した絵唐津等の古唐津、古伊万里や志野・黄瀬戸の出土量が極めて少ない。このうち絵唐津を中心とした古唐津は、(その1)で報告した富山城廢長期外堀1-SD4の最下層から多量に出土しており、屋敷地の時代による変遷が確認できる。また北陸の調査をみてみると、福井城の調査では、在地の窯であり圧倒的シェアを誇ると考えられる越前の播鉢のみではなく、幅広で垂直に立ち上った口縁帯を持つ備前系の播鉢も一定量出土しており、上級武家屋敷地を中心に、備前など遠隔地の播鉢も用いられていたとされる。加賀地域でも16世紀後半～末以降、播鉢を中心として備前の出土が確認されている。今回の調査では、その他の調理具に含めたものの、同様の播鉢も一定量出土しており、北陸の他地域と同様の傾向が確認できた。

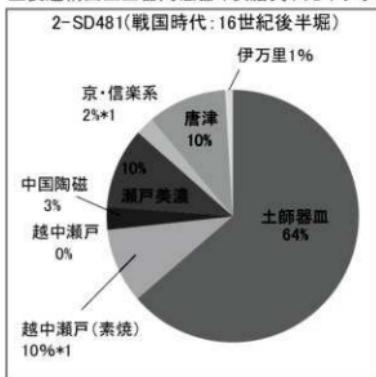
- ⑥17世紀前半の遺物が多く出土する遺構が存在せず、1609年の大火後の富山城廃棄と1640年の前田利次の仮城への再入城の間、生活の規模が縮小・不活性化していたことが再確認できた。17世紀後半の遺構からは、金沢城で多く出土する箱型の中近世土師器皿や底部にケズリを施し丸底志向の越中瀬戸素焼皿が出土した、これは1640年の前田利次の富山城入城に伴い加賀藩からの搬入もしくは影響によるものと考えられる。

- ⑦17世紀～18世紀には、越中瀬戸の生産・流通の拡大がみられる一方、供膳具として京・信楽系および唐津、調理具として唐津・備前系の播鉢が一定量利用される。富山城下町の調査結果でも、18世紀には磁器は伊万里がほとんどを占め、陶器は在地の越中瀬戸とともに、京・信楽系が一定量を占めるようになっている。

- ⑧19世紀の遺物の出土量が少なく、廃棄土坑等も確認できない。三ノ丸がほぼ全焼したと考えられる1831年の大火（通称“濱田焼”）によって生じる焼土・炭化物が多く混じる層も、調査区の大半で確認できなかった。以上のことから、19世紀前半の遺構とそれに伴う遺物は、大火後の整地または明治期の整地により削平されたと考えられる。

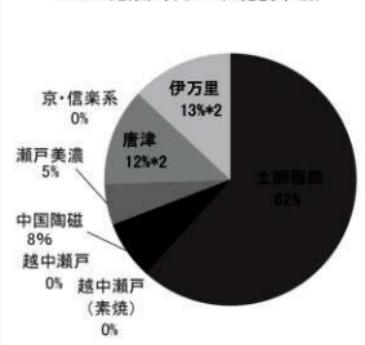
（朝田）

主要遺構出土土器陶磁器(供膳具)比率グラフ(1)



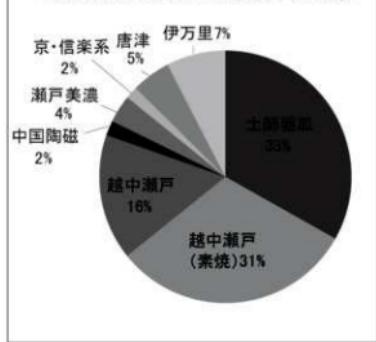
*1:後世混入の可能性高い

4-SD1(戦国時代:16世紀後半壠)

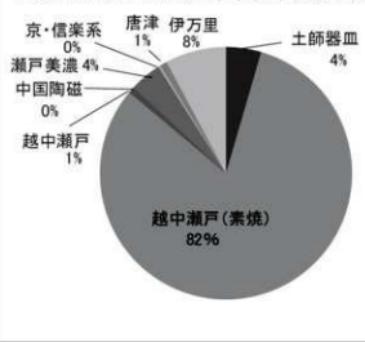


*2:重複する遺構の遺物混入の可能性高い

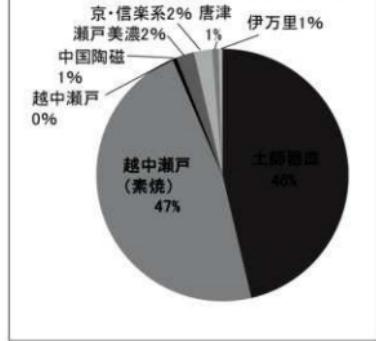
4-SD60(江戸時代:17世紀後半区画溝)



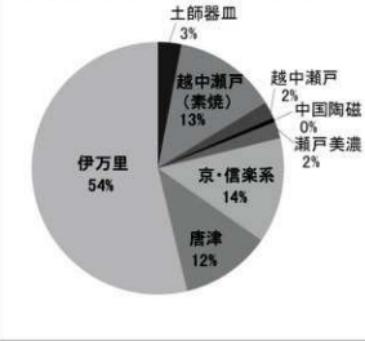
2-SK1000(江戸時代:18世紀前半廃棄土坑)



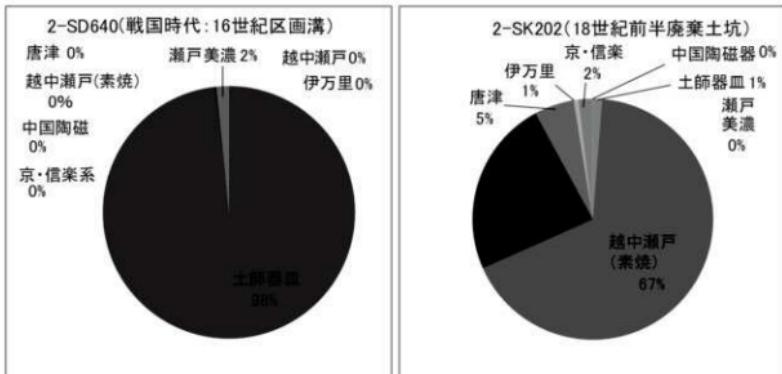
2-SK42(江戸時代:18世紀後半廃棄土坑)



4-SX40(江戸時代:18世紀前半整地層)



主要遺構出土土器陶磁器(供膳具)比率グラフ(2)



2-SK1000(江戸時代: 18世紀前半 廃棄土坑)

土師器皿	3
越中瀬戸(素焼)	54.38
越中瀬戸	0.5
中国陶磁	0
瀬戸美濃	2.77
京・信楽系	0.2
唐津	0.6
伊万里	5.21

4-SD1(戦国時代: 16世紀後半 堀)

土師器皿	9.9
越中瀬戸(素焼)	0
越中瀬戸	0
中国陶磁	1.2
瀬戸美濃	0.85
京・信楽系	0
唐津	2
伊万里	2.1

2-SK42(江戸時代: 18世紀後半 廃棄土坑)

土師器皿	24.8
越中瀬戸(素焼)	25.3
越中瀬戸	0
中国陶磁	0.25
瀬戸美濃	1.25
京・信楽系	1.25
唐津	0.45
伊万里	0.25

2-SD640(戦国時代: 16世紀区画溝)

土師器皿	21.4
越中瀬戸(素焼)	0
越中瀬戸	0
中国陶磁	0.05
瀬戸美濃	0.35
京・信楽系	0
唐津	0
伊万里	0

4-SD60(江戸時代: 17世紀後半 区画溝)

土師器皿	24.1
越中瀬戸(素焼)	22.6
越中瀬戸	11.75
中国陶磁	1.35
瀬戸美濃	2.6
京・信楽系	1.15
唐津	3.65
伊万里	5.5

4-SX40(江戸時代: 18世紀前半 整地層)

土師器皿	4.73
越中瀬戸(素焼)	20.96
越中瀬戸	3.45
中国陶磁	0.77
瀬戸美濃	3.44
京・信楽系	21.26
唐津	18.3
伊万里	84.65

2-SD481(戦国時代: 16世紀後半~17世紀初 堀)

土師器皿	6.6
越中瀬戸(素焼)	1
越中瀬戸	0
中国陶磁	0.3
瀬戸美濃	1.07
京・信楽系	0.25
唐津	1.05
伊万里	0.1

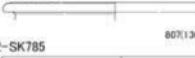
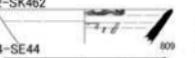
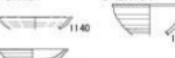
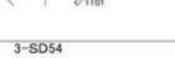
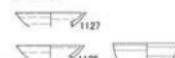
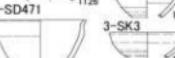
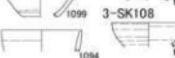
2-SK202(江戸時代: 18世紀前半廃棄土坑)

土師器皿	0.2
越中瀬戸(素焼)	10.6
越中瀬戸	3.75
唐津	0.85
伊万里	0.1
京・信楽	0.3
中国陶磁器	0
瀬戸美濃	0

第8表 出土遺物計量結果一覧表

時期		中・近世土師器															
	前半	2-SD70	3	4	6	8	10	12	14	16	17						
15	中世 頃	2-SD70	1	2	4	5	7	9	11	12	13						
	後半	2-SK1123	502	507	511	513	523										
	前半	2-SD470(古)	35	38	41	42											
16	中世 頃	2-SD473	52	53	56	57											
	後半	2-SK538・539	345	389	339	308	309	2-SK607	268								
	末 初	2-SD481	69	73	74	75	76	83	84								
17	前半	2-SD472	45	51	85	86	87	88	2-SK611	337							
	中頃	4-SD58	746	749	750	171	172	174	175								
	後半	2-SK1	187	2-SK995	492	2-SK1066	497										
18	前半	2-SE480	164	2-SK194	250	251	252	2-凹地	529								
	中頃	2-SK67	206														

第188図 出土土器変遷図（1）中・近世土師器（S=1:6）

時期		中国磁器		珠洲・越前	
15世紀	前半	2-SD45  1194	2-SE564  1178(14C)	2-SE414  807(13C 1:8)	3-SD54  814
	中頃	2-SD70  1171	2-SK785  811(1:8)	2-SK1191  813(1:10)	
	後半	2-SK347  1180	2-SK673  1182	4-SD58  816(1:10)	2-SK787  837
	前半	4-SD47  1195	4-SK134  1137	2-SK462  809	2-SK785  837
	中頃	4-SD1  1190 (1:10)	4-SD45  1192	4-SE44  818	
	後半	4-SD45  1193			
	前半	瀬戸美濃 3-SK134  1140	3-SK134  1136	2-SD470  821	2-SE499  826
	中頃	3-SK134  1139	2-SK656  1189	2-SD640  823	2-SK558  831
	後半	2-SE47  1101	2-SE947  1181(16C)	2-SE47  825	2-SK652  834
16世紀	前半	3-SD54  1127	2-SE564  827(1:10)	2-SK830  838(1:10)	
	中頃	2-SD471  1126	3-SK3  1124		2-SK304  830
	後半	3-SK108  1099	2-SE370  1102	2-SK637  833	2-SK572  832
1092(1:10) 1094					

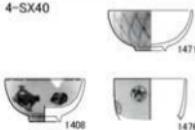
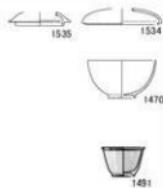
第189図 出土土器変遷図（2）中国磁器（S=1:8）、珠洲・越前（S=1:8・1:10）

時期	瀬戸美濃	中国磁器
17世紀	前半	<p>4-SD60 1200 4-SX40 1166 2-SD1033 1175 2-SK1066 1184 2-SE370 1176 2-SE413 1177 3-SK120 1177 2-SK108 1188 4-SX40 1206 4-SD1 1206</p>
		<p>2-SD123 1172 (1:4) 4-SX40 1207</p>
	後半	↓ 伝世
18世紀	前半	<p>4-SX40 1168 4-SX40 1157 2-SD1033 1164 2-SK1066 1162 2-SE413 1161 4-SX40 1245 4-SD60 1246 2-SE413 1292</p>
		<p>4-SX40 1160 4-SX40 1163 2-SD1033 1229 2-SE413 1230 2-SD1033 1234 2-SE413 1236 2-SD1033 1224 2-SE413 1237 2-SE413 1229</p>
	後半	<p>2-SD1033 1247 2-SE413 1333 2-SD1033 1232 2-SE413 1238 2-SD1033 1231 2-SE413 1235 2-SD1033 1240 2-SE413 1243 2-SD1033 1241 2-SE413 1243</p>

第190図 出土土器変遷図（3）瀬戸美濃（S=1:8）、中国磁器（S=1:8・1:10）

時期	越中瀬戸(素焼皿)	越中瀬戸(施釉)
I 16世紀末 17世紀初 期		<p>4-SX4 1056</p> <p>2-SD123 977</p> <p>4-SD481 982</p> <p>4-SD60 1042 (1:10)</p> <p>1043 (1:10)</p> <p>1045 (1:10)</p>
II 17世紀前葉 中頃 期		<p>2-SK202 1000</p>
	<p>4-SK42 932 934</p> <p>930 941</p>	
17世紀後半 期	<p>2-SK202 872</p> <p>4-SX40 973</p> <p>4-SX4 976</p> <p>944</p> <p>935</p> <p>952</p>	<p>4-SX40 1065</p> <p>2-SK951 1011</p>
III 18世紀前半 期	<p>2-SK1000 898 917</p> <p>922 925</p>	<p>2-SK656 1008</p> <p>2-SK1000 1015</p> <p>2-SK202 996</p> <p>997</p>
18世紀後半 期	<p>962 (18C 中頃) 947 (18C 中頃)</p> <p>4-SX5 954</p> <p>4-SX40 969</p>	
19世紀	<p>4-SX40 956 957</p> <p>972</p>	

第191図 出土土器変遷図 (4) 越中瀬戸 (S=1:6)

時期	唐津	伊万里	肥前系
前半			
17世紀 中頃			
後半	2-SD60  	4-SX40 	4-SX40 
前半	2-SK202 2-SK202 	4-SX40 	
18世紀 中頃	4-SX40   	4-SD60  4-SX40  4-SX5 	4-SX40 
後半		4-SX40  	

第192図 出土土器変遷図（5）唐津・伊万里・肥前系（S=1:6）

第3節 中世莊園「富山郷」について

1. はじめに

駒川左岸の富山城周辺地域は、文献史料から中世莊園「富山郷」が存在した地域と言われていた。2007年本丸東端での調査では、室町時代の遺構を確認し、「富山郷」の一部である可能性を指摘している〔富山市教委2016〕。

今回の調査で、室町時代中期（15世紀前半）の区画溝2-SD70などが見つかった。これらの区画溝の時期が、「富山郷」が文献史料に表れる時期（14世紀末～15世紀前半）と一致することから、「富山郷」に関連する遺構と推定した。

また、本調査区で検出した中近世の溝や堀の多くは、N-10°～12°-Eもしくは直交するN-78°～80°-Wの主軸方向を持っており、「富山郷」の区画溝と推定した2-SD70などの主軸方向N-12°-Eとはほぼ同じである。のことから「富山郷」に条里地割が施工され、その後もこの条里地割が踏襲されたことから同じ主軸方向を持っていると推定した。条里地割の施工時期は、2-SD70出土遺物から15世紀前半と考えられる。

ここでは、「富山郷」に関する文献史料および周辺での発掘調査の結果等を整理分析し、中世莊園「富山郷」について検討する。

2. 「富山郷」に関する研究

（1）「富山郷」について

「富山郷」に関する文献史料は、現在のところ5通確認されている〔【史料B】～【史料F】〕。初見史料である【史料B】の『吉見詮頼寄進状』（応永5（1398）年）には「外山郷」と記されるが、その他4通には「富山郷」と記されていることから、以下「富山郷」に統一する。

「富山郷」の研究については、久保尚文氏の研究〔久保1996・2014〕が詳しい。久保氏は5通の文献史料から以下のことを推定している。

- i) 富山郷には、吉見詮頼が東岩藏寺に寄進した地頭職領と北野殿（3代將軍義満側室の西御所）が東岩藏寺に寄付した開発領主職領（太田小次郎入道跡領）が存在する。
- ii) 富山郷は、南北朝期には太田保内に所属し、開発領主は太田氏であった。
- iii) 富山郷には、鎌倉期の史料から太田保内の布瀬村や赤田村は含まれない。
- iv) 富山郷の範囲は、安野屋近くで松川と合流している四屋川とその周辺湿地帯あたりが南の境界で、駒川と神通川の合流地点が北の境界であり、西田地方の神明宮（現千石町）と東田地方の神明社（現千歳神社）の間とされる江戸時代の富山町の範囲と一致している。

（2）「富山柳町」について

「富山郷」は、永享2（1430）年に隣接する「柳町」の地とともに6代將軍足利義教によって、側室の正親町三条尹子（翌年、尹子は正室となる）へ与えられた〔【史料G】〕とされる。【史料G】以後の文献史料には、「富山柳町」と記されていることがほとんどである〔【史料G】～【史料S】、【史料U】〕。【史料T】の『椎名慶胤安堵状』には「富山郷」を「富山之保」と記されている。

「富山柳町」は、【史料R】の『三鉢寺住持善空置文』（文明15（1483）年）に「富山柳町之両所」とあることから、「富山」と「柳町」の2箇所を指すと考えられている。

「富山柳町」について、久保氏は「神通川経由の河川舟運に便利な駒川右岸に立地した柳町は、中世において富山郷の湊の役割を担って発展した」〔久保1996〕とし、「富山郷」とその川湊「柳町」と捉えていた。しかし、近年「湿地帯に囲まれた水郷地帯の富山郷の一角、駒川の神通川への合流地点は物資集積の便がよく、舟運に適した地帯であった。両岸の富山・柳町が一对の川湊「富山・柳町」を包含する「富山郷」とした。また、「富山柳町」の位置については「柳町は現富山市柳町一～於保多町辺りの町場で、富山町も同様の町場であり、神通川流域に形成された駒川沿い荒蕪地の自然堤防帶に向かい合つ

第9表 富山郷関連年表

時代	年号	西暦	富山郷の出来事	文書
鎌倉	正中2	1325	大江頼元が息子元長に「太田保赤田村」、元忠に「布瀬村」を譲る。 (=「富山郷」に赤田村・布瀬村は含まれない)	【史料A】
室町	正平4 貞和5	1349	観応の擾乱(～1352年)	
	応安2	1369	能登守護吉見氏頼が越中守護斯波義将とともに桃井直常を討伐する。	『得田文書』
	応安3頃	1370	吉見氏頼が桃井氏討伐の恩賞として、関所地「外山郷地頭職」領を押領。	
	応永5	1398	能登守護吉見詮頼が京都東岩藏寺に「外山郷地頭職」領を寄進。	【史料B】
			西御所(義満側室、後の北野殿)が京都東岩藏寺に「富山郷太田保太田小次郎入道跡」領を寄付。	【史料C・D・F】
	永享2	1430	6代將軍足利義教が側室正親町三条尹子(翌年に正室)に「富山柳町」を与える。	【史料G】
	嘉吉元	1441	嘉吉の乱	
	嘉吉3	1443	瑞春院(三条尹子)が京都二尊院に「富山柳町」を夫・息子・父の菩提料として寄進。 (兄正親町三条実雅の寄進添状がある)	【史料H・I】
			幕府納銭方初井備後入道善照が年貢300貫文を納入することで「富山柳町」の代官を請け負う。	【史料J】
	文安元	1444	管領畠山持国によって「富山柳町」が二尊院領に安堵される。	【史料K】
戦国	宝徳2	1450	初井備後入道善照が「富山柳町」の年貢300貫文の進納を約束する。	【史料L】
			『東岩藏寺真性院頒越中富山郷文書目録』が作成される。	【史料F】
	康正2	1456	高野五郎左衛門尉慶宣が年貢300貫文を納入することで「富山柳町」の代官を請け負う。	【史料M】
	応仁元	1467	応仁の乱が勃発(～1477年)	
	応仁2	1468	二尊院炎上。以後、「富山柳町」は守護押妨・代官不履行の状況となる。	【史料R】
	文明3	1471	室町幕府が「富山柳町」を二尊院直務支配とする。 二尊院再興のため「富山柳町」の還補を求める。	【史料N・O・R】
	文明6	1474	室町幕府が二尊院領「富山柳町」の引き渡しを命じる。	【史料P】
	文明7	1475	甘露寺親長が「富山柳町」のことで幕府の勅裁を求める。	【史料Q】
	文明19	1487	越中守護畠山政長が京都二尊院による「富山柳町」の直接支配を承諾する。 (=文明年間に「富山柳町」は畠山氏の守護譲となる)	【史料S】
	永正16	1519	新川守護代椎名慶胤が土肥松鶴に「富山之保・横江保」を安堵する。	【史料T】
	大永8	1528	京都二尊院が土肥平右衛門の「富山柳町」への違乱排除を幕府へ要請。	【史料U】
	天文12頃	1543	神保長職が富山城を築城。	

て成立した」と考えられた〔久保2014〕。

3. 周辺の調査

A. 富山城跡本丸（2007年調査）

本調査区から北東約350mの本丸地内に位置する。

上下2層の中世の遺構面を検出している。中世1期（下層）は14世紀～15世紀代であり、「富山郷」の一部である可能性を指摘している。中世2期（上層）は、15世紀以降であるが、近世富山城の土塁構築の際に大きく削平されており、詳細は不明である。

中世1期には溝SD04・SD05があり、SD05が新しい。SD04の規模は幅0.45m、深さ0.06mで、主軸方向はN-17°-Wである。SD05の規模は幅0.7m、深さ0.20～0.26mで、主軸方向はN-10.5°-Eである。

SD04・SD05の主軸方向は、「富山郷」の条里地割と大きく異なる。

また、くぼ地SX1からは炭化木材・魚骨・炭化穀類などとともに笄・高級漆器・輸入陶磁が出土したことから、廃棄した主体者が有力武家であったと推定した。

B. 富山城下町遺跡主要部（2008年調査）※発掘当時は富山城跡

本調査区から南西約130mの絶曲輪4丁目・旅籠町地内に位置する。

中世の遺構を同一面で検出しているが、出土遺物から中世とした主な遺構にSD013、SD015、SD034がある。

SD13は、15世紀後半～16世紀前半の溝である。SD013の規模は推定幅2.6m、深さ1.2mを測り、主軸方向はN-85°-Wである。SD015は、SD013より新しい16世紀前半以降の溝である。SD015の規模は幅3.2m、深さ1.2mを測り、主軸方向はN-82°-Wである。SD015は屈曲してSD034へ繋がっている可能性がある。SD015最下層のV字状の窪みは本調査区の2-SD70などと類似しており、2-SD70と同時期である15世紀前半の溝である可能性がある。SD034は16世紀代の溝である。SD034の規模は、幅1.8m以上、深さ0.7～0.8mを測り、主軸方向は搅乱等で不明である。SD013・SD015の主軸方向は、「富山郷」の条里地割とやや異なる。

C. 千石町遺跡（2015年調査）

本調査区から南約600mの千石町4丁目地内に位置する。

15世紀前半の遺物が出土する直交する区画溝を検出した。「太田保」の区画溝の可能性が示唆されている。

SD04の規模は、幅1.04m、深さ0.20mを測り、主軸方向はN-79°-Wである。SD05はSD04と繋がる区画溝とされた。SD04・SD05の主軸方向は、「富山郷」の条里地割とほぼ同じである。

このように本調査区周辺には遺構数は少ないが、「富山郷」「富山柳町」と同時期にあたる室町時代や戦国時代の遺構が広がっている。

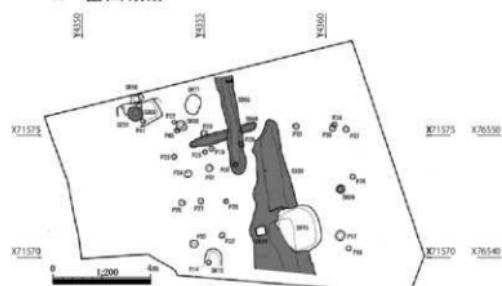


第193図 周辺の調査区位置図 (S=1/15000)

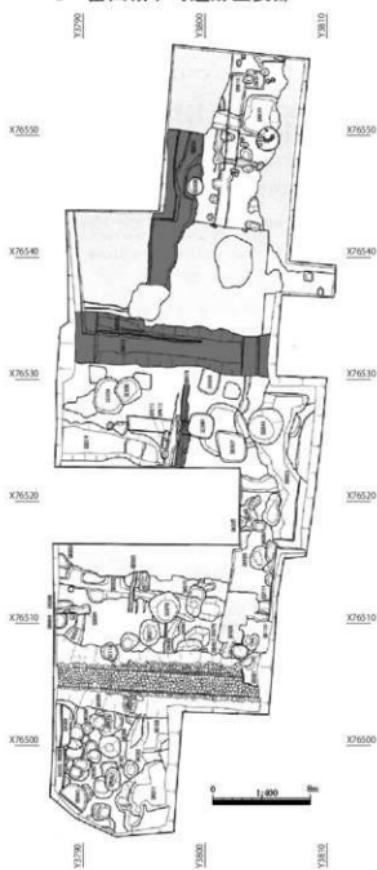
4. 市街地に残る条里地割

本調査区の第1期調査で検出した慶長期富山城外堀や「C. 千石町遺跡」の区画溝は「富山郷」の条里地割と同じ主軸方向を持っており、本調査区周辺に「富山郷」の条里地割が残っている可能性

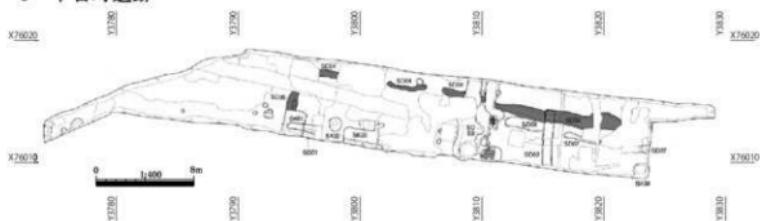
A 富山城跡



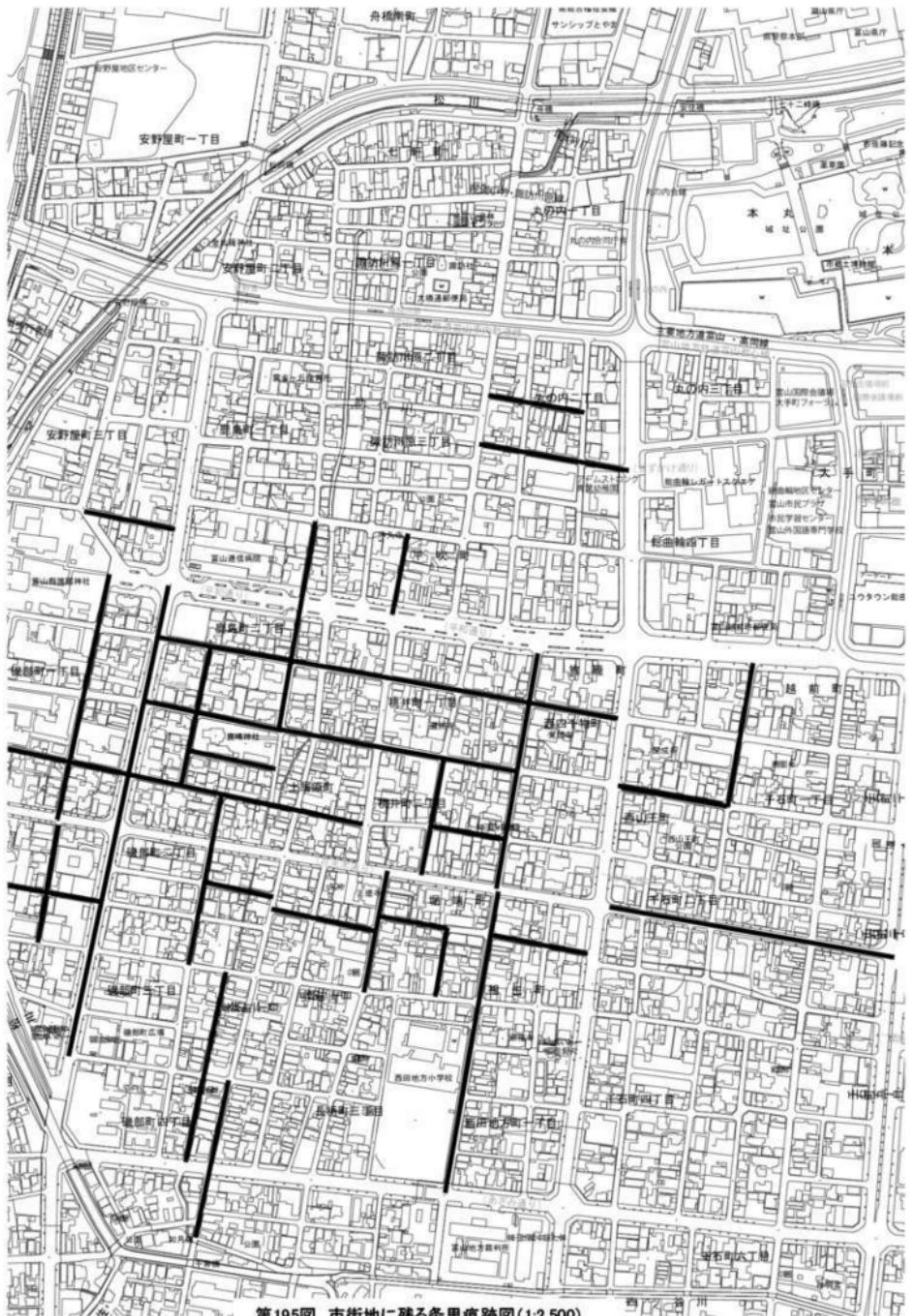
B 富山城下町遺跡主要部



C 千石町遺跡



第194図 周辺の調査区平面図



第195図 市街地に残る条里痕跡図(1:2,500)

が高いと考えた。

そこで、本調査区周辺で条里区割の痕跡を調べたところ、第196図のように本調査区の南東地域の道路地割で多くの痕跡が確認できた。本調査区の南東地域は、現在の磯部町、桃井町、鹿島町、長柄町、千石町などの市街地となっているが、この地域を江戸時代の古絵図で見ると、武家屋敷や町屋敷は描かれておらず、田畠の広がる農村地域であった。このことから農村地域では条里地割が踏襲され、現代の道路地割として残った一方、江戸時代に富山城下町となった地域では城下町造成に伴い新しい地割が施工され、条里地割が消失したと考えられる。

5. 「富山郷」の範囲復元

莊園遺跡について宇野隆夫氏の研究の中で、「方形の濠・土塁をもつ平地型の居館（方形居館2型）は、条里景観のなかに立地することが多く、方半町～1町、あるいはそれ以上の規模のものも存在した。」とされ、条里地割に沿った方1町の濠をめぐらせる畿内の中世初期（12世紀）の事例として大阪市長原遺跡例が紹介されている〔宇野2001〕。

本調査区の2-SD470（古）は居館の堀であり、長原遺跡同様に堀が条里地割に沿ったものであると考え、「富山郷」の条里地割をN-11°-E°として復元を試みたものが第197図である。「B. 富山城下町遺跡主要部」の溝SD013・015はこの復元条里地割上を通る。

復元条里地割の境界について、南側は四谷川より南側に「富山郷」に含まないとされる布瀬（村）があることから、四谷川を境界とした。西側は松川（旧神通川）を境界とした。北側は清水町1丁目の神明社の北側道路地割がN-79°-Wであることから、この道路地割を境界とした。東側は富山地方鉄道不二越線（以下、不二越線）の清水元町一西公文名町間の鉄道線路がN-11°-Eであることから、鉄道線路を境界とした。この境界ラインを結んだ、東西4里（24町 \approx 2.6km）、南北1条半（9町 \approx 1km）の範囲が「富山郷」の推定範囲と考える。

東側境界とした不二越線について、万治3(1660)年に富山藩と加賀藩で領替えが行われた際に設定した富山・加賀両藩境を走っていると推定されている〔久保2011〕。このことから「富山郷」の境界が富山・加賀両藩境となり、その後不二越線となった境界の変遷が推測される。また、「富山郷」の範囲が領替えて富山藩領となった範囲と一致する可能性があり、富山藩領確立に「富山郷」の範囲が大きく影響を及ぼしたのかもしれない。

また、不二越線は北側境界との接点である清水元町付近を超えて栄町二丁目付近まで直線の線路が延びており、北側境界より北部にある「柳町」を含めた範囲が「富山郷」の範囲であった可能性も考えられる。そうなると、東西4里、南北3条の範囲が「富山郷」の推定範囲となりうる。

6. おわりに

本稿では、今回の調査や周辺の調査から、中世莊園「富山郷」の範囲を推定し、その結果から「富山郷」と富山藩領の関連性について飛躍した推論を重ねた。

しかしながら、今回の調査によって「富山郷」の条里地割が明らかになったことなどは、「富山郷」を研究する上で大きな一步となった。

最後に、本稿を作成するにあたり、久保尚文氏、坂森幹浩氏、萩原大輔氏、富山市郷土博物館には多大なご指導ご協力をいただいた。記して謝意を表します。

（堀内）

第196図 「富山郷」推定範囲図(1:12,500)



次者弘尊和尚、次者小僧善空、以上三代者西山之住持兼帶之、但前住尊和尚

者、稟示鏡和尚之附屬、先住當院後、被住西山也、雖有前後本末、兼住不能

左右、予又住西山而兼之上者、後々須守此例、努力々々、不可令別相伝、但

依今度之劇亂、応仁二年九月十一日廻祿畢、諸國散在之院領等、或為守護押

妨之、或為代官令自專之、雖然於陣中、預公武嚴密之成敗、文明三年之秋、

先越中國富山柳町之両所、被還補之、可致寺家再興之沙汰云々、然而旧跡之

還住尚以難治之間、暫洛城之傍構小坊、自同五年八月上旬、於此所、致勲行

之處也、西山并諸末寺之行事等、又大概修之、然而送三四ヶ廻之春秋之處、

天下漸有靜議之間、仍亂中不知行之院領事、重而申請還補之下知、同十二年

六月四日、於旧跡、先造當庫院一宇、同廿四日、(元和元年)普広院急恒例作善等、於此

新坊沙汰之了、自其以來、長日臨時之勲行者、粗羅渡旧規、仏殿僧房之再造

者、支度未立命中之營構尤為難、同業之門人紹隆勿憇、

(中略)

文明十五年一月十五日誌之、 西山參鈴寺住持沙門善空 (花押)

當院住持

大永八年三月廿一日 散位 (花押)
信濃守 (花押)

【史料S】守護富山政長書狀〔二尊院文書〕

御寺領富山柳町事、就當時之儀預候、心得申候、御年貢等涯分加增候之様、

可致執沙汰候、當方一途候者、不可有違亂之族候間、則可渡進之候間、如前々

可有御直務候、恐惶謹言、

(元和十九年)

二月十二日

(元和二十一年)
政長 (花押)

二尊院

【史料T】椎名慶胤安堵狀〔上杉家文書〕

今度新九郎殿之儀、御忠節候、然上者、富山之保并横江保不可有相違候、委

細馬移中務丞可申候、恐々謹言、

(元和十九年)
八月廿三日
土肥松鶴殿 (花押)

(元和二十年)
慶胤 (花押)

【史料U】室町幕府奉行人連署奉書〔二尊院文書〕

二尊院領越中國富山柳町事、為(元和元年)普広院殿御寄進之地、當知行之處、近年土

肥平右衛門尉達乱云々、太無謂、被退彼妨上者、早如元、令直務、可被全所

務之田、所被仰下也、仍執達如件、

何時、為寺家可有御改易候、其時不可申一言子細者也、仍為後日、請文狀如件、

康正二年九月五日 慶宣（花押）

進上 一二尊院納所御寮

二尊院領越中国富山柳町事、可被直務之旨、先度御成敗之寔、於國有難決之族云々、太不可然、所詮堅被加下知、可被沙汰付下地於寺家代官、若猶不承引者、可被处罚科之由、所被仰下也、仍執達如件、

文明六年閏五月廿四日 沙弥（花押）

丹後前司（花押）

畠山左金吾代

【史料N】室町幕府奉行人連署奉書〔〔二尊院文書〕〕

当院領越中国富山柳町事、如元令直務、可被致寺家再興之沙汰之由、所被仰下也、仍執達如件、

文明三年十月十六日 肥前守（花押）

下野守（花押）

一二尊院住持

【史料O】甘露寺親長添狀〔〔二尊院文書〕〕

富山柳町事、令奏聞、重勅裁被進之候、地下事于今不渡進之条、太以不可然候、為寺家堅被仰遣、猶難凌候者、急可有御注進候也、恐惶敬白、

一一月一日 親長

一二尊院方丈

【史料P】室町幕府奉行人連署奉書〔〔二尊院文書〕〕

二尊院領越中国富山柳町事、早任奉書之旨、為直務可被沙汰付寺家雜掌之由、所被仰出候也、仍執達如件、

十月十六日 之種（花押）

貞基（花押）

畠山尾州代

【史料R】三鈷寺住持善空置文〔〔三鈷寺文書〕〕

申置条々

（中略）

一、二尊院

法然上人開基之古跡也、代々叡信異于他、家々帰敬喧於世、可謂無双之法幢歟、其住持次第者、法然上人法運正信以來、門葉繼踵、法流無絕、第十世僧令上人之後、先師示鏡和尚伝持以來、為西山末寺、始而所學教院之規式也、

【史料P】室町幕府奉行人連署奉書〔〔二尊院文書〕〕

嘉吉參年十一月八日 善照 (花押)

善照 (花押)

【史料H】瑞春院寄進狀 (〔二尊院文書〕)

越中のくにとやまやなきまちの事、ふくわうゐん殿の御ハんをそへて、なか

く二そんゐんにきしん申候、ふくわう院殿・けいうんゐん殿・せいこうゐん

の御ほたいれう所として、ふたんねん仏そのほか御正き月との御き日とも、

いつまでもけたい候ハぬやうにさためをかれ候へく候、くハしき事をハ、

そち殿のそへしやうをまいらせ候、かしく、

かきち三年十月廿八日

〔三院〕 (文押)

〔二〕そん院のほうちやうへ」

【史料I】正親町実雅副狀 (〔二尊院文書〕)

越中國富山柳町事、自大御所、御寄進狀執進候、勤行等事、任式目之旨、

尽未來際、無退転候様、可有執御沙汰候由、能々可申旨、被仰下候也、恐惶

敬白、

〔三院〕 (文押)

二尊院方丈

【史料J】稻井善照請文 (〔二尊院文書〕)

越中國富山柳町事、參百貫文每々内中仁連々仁可窮濟申候、

御料所越中國富山柳町之御年貢事、參百貫文事每々内中仁連々仁可窮濟申

【史料K】足利將軍家御教書 (〔二尊院文書〕)

越中國富山柳町事、早任嘉吉三年十月廿八日大御所御寄附狀之旨、嵯峨二尊

院全領知、可被專勤行之由、所被仰下也、仍下知如件、

文安元年五月廿五日

沙弥 (花押)

【史料L】稻井善照請文 (〔二尊院文書〕)

御料所越中國富山柳町之御年貢事、參百貫文事每々内中仁連々仁可窮濟申

候、仍状如件、

宝徳弐年卯月十三日 善照 (花押)

善照 (花押)

【史料M】高野慶宣富山柳町代官職請文 (〔二尊院文書〕)

請申 御料所越中國富山柳町御代官職事

合兩所者

右於御年貢者、不謂旱水損、參百貫文請切申候、此内從正月至于十二月、

倍式拾貲文可致其沙汰候、相殘百八十貫文内、六月廿四日普広院殿様

御仏事已前、伍拾貲文又自七月至十二月六箇月中百參拾貲文可充清

仕候、殊 慶雲院殿、瑞春院殿兩御所様御作善前、別而可致奔走候、於閏

月御月宛者、以百三十貫文内拾貲文可令進納候、万一未進懈怠儀候者、雖為

京之内 西洞院 東洞院 五条

富小路 西油小路 大官

南土御門 北正親町

伊勢国 鈴鹿莊 農田御尉

越中国 多浦庄 河尻 富山鄉

能登國 鮎上村 上町野莊 下町野莊

揖津國 西宮

尾張國 井上庄内 中野鄉

堀河院御領

若狭國 藤井保 備中國 縣主保

備後國 奴曾保 美作國 英多保

伊予國 得能保

以上五十所者 後光嚴院御寄附也

後京極女院御附之地

近江國 志賀莊内 播磨國 田郷

右ノ二ヶ所者結縁灌頂用

元弘三年六月廿七日御寄附之地也

丹波國 六人部庄内 草山 大内

多保村 行枝谷

參川國 碧海庄 上戸中曾綱牧内

市摩本一色

【史料F】東岩藏寺真性院領富山鄉文書目録〔渡辺氏蒐集文書〕

東岩藏寺真性院領越中国富山郷文書目録
〔渡辺氏蒐集文書〕

本主吉見殿寄進状
〔花押〕

北野殿御寄附狀
〔花押〕

長神寺殿御判
〔花押〕

鹿苑院殿御判
〔花押〕

通案 守護代遊佐長護
〔花押〕

通案 守護代遊佐長護
〔花押〕

長神寺殿御書
〔花押〕

齊藤状
〔花押〕

二通案文 鹿苑院御判并吉見殿壳券狀
〔花押〕

二通 前御職御銘物
〔花押〕

已上十一通
〔花押〕

宝徳二年九月 日
祐金 (花押)
〔花押〕

【史料G】足利義教御内書〔二尊院文書〕

越中国富山柳町御ちきやう候へく候、かしく、

〔本字〕
〔花押〕

六月九日
〔花押〕

【史料A】大江顯元安堵申狀案〔金沢文庫古文書〕

左衛門尉大江顯元謹言上

欲早蒙安堵御成敗、伊与國久米郡惣政所并野口保地頭代官職等事

右、亡父覺一押領之地越中國太田保内赤田村者、申付中務丞元長、布瀬村者、

讓給四郎元忠、以久米郡内下出作、令讓附九郎成朝訖、而於當郡惣政所并野

口保御代官職者、可申給之旨、申付顯元之條、人皆所知也、就中、自六波羅

□、為中野兵庫允兼幸於御使、被尋下遺跡事於覺一之日、令言上此子細了、

此上欲預御裁許、次御物奉行同科所丹後國大石庄事、顯元為嫡子、申付惣跡

之上者、宜為御計歟之由、同令申御使畢、是又、顯元為嫡子、奉公于今無相

違、且已本職也、若可被仰付兄弟中者、顯元為生得嫡子之上者、不可有予儀

條、可足質察哉、然則、賜安堵御下文、弥為抽奉公忠勤、恐々言上如件、

正中二年十一月 日

【史料B】吉見詮頼寄進狀〔富山市郷土博物館所蔵文書〕

寄進 東岩威寺

越中國外山郷地頭職事

右当所者、為勳功之賞、道源^{おとせ}一押領之後、被讓与詮頼、當知行無相違地也、

而且為亡父道源菩提、且為心中所願成就、相副御下文以下公驗等、限永代、

所奉寄附也、仍為後証、寄進之狀如件、

応永五年五月三日

兵部大輔詮頼（花押）

【史料C】越中守護畠山基國遵行狀〔相州文書〕

東岩藏寺領越中國 □ □ 保富山鄉^{太田保内赤田村}任去年五月二日御 □ □ □ 、諸公事 □

并守護役以下、向後堅可催促之狀如件、

応永五年十二月十七日

（花押）

遊佐河内入道殿

（花押）

【史料D】越中守護畠山基國遵行狀〔大覚寺文書〕

越中國太田保富山鄉^{太田保内赤田村}事、任去八日御寄附可沙汰付東岩藏寺雜掌之狀如

件、

応永五年十二月十七日

（花押）

遊佐河内入道殿

（花押）

【史料E】東岩藏寺領目録〔大覚寺文書〕

東岩藏山 勅願次第

堀河院 龜山院 後宇多院

同寺領之次第

山城国 山科郷内 二子塚 白河

朱雀院田 烏羽田 赤辻

西岡海印寺庄 生田村

第4節 富山城跡出土の中近世土師器皿について

1. はじめに

近年富山市街地の再開発によって、富山城跡や富山城下町遺跡主要部において発掘調査が数多く行われている。筆者は、これまでの富山城跡や富山城下町遺跡主要部の発掘調査で出土した近世土師器皿の集成を行った〔堀内2017〕。

今回の調査で15世紀～19世紀までの遺構・遺物を確認し、中世から近世に至る状況を把握することが可能となった。そこで、本稿では、本調査区出土の中近世土師器皿を中心に15世紀～18世紀前半の中近世土師器皿について改めて集成する。中世土師器については、宮田氏の編年〔宮田1997〕に基づいて集成を行った。

2. 中近世土師器皿の器種分類

中近世土師器皿の器形分類は、第198図に示した。A類・B類：中世前期からの系譜がつながるもの、C類：京都系土師器の影響を受けて生まれたものとした。なお、前回の集成で分類したI類はA類（一部、C2類）、II類はC類に当たる。

A類	<ul style="list-style-type: none"> 口縁端部に一段のヨコナデを施す 底部は丸底、平底の両者がある 	
	<ul style="list-style-type: none"> 底部から口縁部が直接外反 底部と口縁部の境にヨコナデによる稜をもつ 底部は平底である 	
B類		
C類 (京都系)	<ul style="list-style-type: none"> 体部が開き気味に立ち上がる 口縁部はヨコナデして外反 ヨコナデの強いもの、弱いものがある 口縁端部は丸く納めるもの、つまみ上げるものがある 細分の余地が大きい 	
非 口 クロ	<ul style="list-style-type: none"> 体部が開き気味に立ち上がる 口縁部はヨコナデして短く外反 ヨコナデの強いもの、弱いものがある 	
	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部はヨコナデして外反 ヨコナデの強いもの、弱いものがある 	
RA類	<ul style="list-style-type: none"> 体部が開き気味に立ち上がる 口縁部はヨコナデして外反 口縁部内面に端面形成 	(薄手)
		(厚手)
(能登系)・胎土に海綿骨針が混じる		
ロ ク ロ	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部はヨコナデして外反 底部および体部下半に回転ヘラケズリ 	
	<ul style="list-style-type: none"> 底部回転糸切り 	

第197図 土師器皿の器形分類

3. 主要遺構の概要

(1) 富山城跡三ノ丸（総曲輪レガートスクエア地区）

A) 2区 2-SD70

中近世土師器皿はA類、B類、C1類が出土しているが、B類は1点のみである。また能登系中近世土師器（以下、能登系）が一定量出土している。法量は、小（7.6～9.3cm）、中（10.6～12cm）、大（14cm）、特大（15.8cm）で、能登系は12～13.8cmである。上田分類C類の青磁碗が共伴する。

B) 3区 3-SE77

中近世土師器皿はA類、B類、C1類が出土している。能登系も1点出土している。古瀬戸IV期の天目が共伴する。法量は、小（9.3～9.8cm）、中（11.8～12cm）、大（14.2～14.7cm）で、能登系は11cmである。器高2cm以下の扁平なものが多い。

C) 3区 3-SK134

中近世土師器皿はA類、C1類が出土している。大窯1期の瀬戸美濃、青磁が共伴する。法量は、小（8～10.3cm）、中（10.6～11.3cm）、大（13～14.6cm）である。

D) 2区 2-SK705

中近世土師器皿はA類、C1類、C2類が出土している。共伴遺物はない。法量は、小（8.9～10.2cm）、中（11～12.4cm）、大（13.5～14.6cm）、特大（15.6cm）である。小皿が多い。

E) 3区 3-SD54

中近世土師器皿はA類、C1類、C2類、C3類が出土している。能登系も1点出土している。大窯4期の瀬戸美濃、V3新期の越前描鉢、珠洲、青花が共伴する。法量は、小（8～10.4cm）、中（10.6～12.4cm）、大（12.7～14cm）、特大（15.8～18.8cm）で、能登系は10.65cmである。

F) 2区 2-SD481

中近世土師器皿はA類、C1類、C3類が出土している。能登系も1点出土している。大窯4期の瀬戸美濃・志野、肥前I期の唐津、越中瀬戸、越前、信楽、青花が共伴する。法量は、小（9.7～10cm）、中（11.9～12.8cm）、大（13.4～14cm）で、能登系は11.4cmである。

G) 4区 4-SD58

中近世土師器皿はC3類が出土している。能登系も1点出土している。瀬戸美濃、珠洲、京・信楽系陶器、伊万里が共伴する。法量は、小（8.6～10.2cm）、中（11.7～13cm）で、能登系は12.5cmである。中皿が多い。

H) 4区 4-SD60

中近世土師器皿はC1類、C3類が出土している。能登系も1点出土している。越中瀬戸、瀬戸美濃、越前、肥前系陶器（唐津・伊万里など）、中国製陶磁器が共伴する。法量は、小（9cm）、中（11.8～13.4cm）、大（13.6～14.8cm）で、能登系は12cmである。中皿が多い。

(2) 富山城跡本丸・西ノ丸（城址公園地区）

I) 富山城跡西ノ丸（2006ステージ地区） SK35・36

西ノ丸内で検出した隣接する2つの土坑で、接合する遺物もあり、同一時期の遺構と考えられる。中近世土師器皿はA類、B類、C1類が出土しているが、B類は1点のみである。また、ロクロ土師器RA類、RB類が出土している。共伴遺物はない。法量は、小（8.2～10.3cm）、大（10.8～11.8cm）である。ロクロ土師器の法量は、小（4.6～8.3cm）、大（11.7～13.2）、特大（15.4～15.8cm）である。

J) 富山城跡本丸（2004試掘） H15-1T SD1

本丸中央部で検出した中世富山城の堀である。1560年に神保長職が富山城を自焼した際の焼失廃材とともに中近世土師器が堀に投げ込まれたものと推定される。中近世土師器はA類、C1類、C2類、C3類が出土している。共伴遺物はない。法量は、小（8.4～10.4cm）、中（11～12.4cm）、大（13.8～14.6cm）、特大（16cm）cmである。

K) 富山城跡本丸（2008試掘） H20-3T SE1

本丸北東部で検出した井戸である。中近世土師器皿はA類、C1類、C2類、C3類が出土している。

大窓4期の漸戸美濃、越中瀬戸、珠洲、青磁、白磁、青花が共伴する。法量は、小（6.6～10.2cm）、中（10.8～12.8cm）、大（14.4cm）、特大（16.4cm）である。

L) 富山城跡本丸（2008池泉整備地区）SK6・7

本丸中央部で検出した土坑である。中近世土師器皿はSK6からC1類、C2類、C3類が出土し、SK7からC1類、C3類が出土している。SK6・7ともに肥前I期の唐津が共伴する。SK6がやや古い様相を示す。SK6出土の法量は、小（9.4～9.7cm）、中（10.8～12cm）、大（12.8～14.3cm）、特大（15.2～16.7cm）である。SK7出土の法量は、小（9cm）、中（11cm）、大（13～14.3cm）である。

(3) 富山城下町遺跡主要部（ユウタウン総曲輪地区）

M) 1区 SK237

紀年銘のある遺物が出土した土坑である。志戸呂系陶器に『正徳三閏五月』（1713年）と墨書きされている。中近世土師器皿はC1類、C3類が出土している。越中瀬戸、肥前系陶磁器が共伴する。法量は、小（10cm）、中（10.9cm～11.7cm）である。

4. 中近世土師器皿の変遷

富山城跡における中近世土師器皿の編年についてまとめたものが、第199図である。紀年銘を伴った資料は18世紀前半にしか出土していないため、概ね共伴する陶磁器類の年代観に沿った相対的なものである。

器形 各時期の器形の変化について、みていく。

15世紀代は、主にA類と京都系C1類が存在し、少量のB類がある。

16世紀初頭～前半にはB類は存在しなくなるようで、在地系A類と京都系C1類・C2類となる。C1類は明瞭な稜が出来る程強くヨコナデして外反するものが出現し、その中から口縁部が短く外反するC2類が派生する。C1類には口縁端部をつまみ上げるものが増える。16世紀中頃～17世紀前半までは16世紀前半と同じ器形が継続するが、16世紀後半からはC1類・C2類のヨコナデは緩やかになる傾向にある。また、16世紀後半になると、口縁部内面に端面を形成するC3類が出現する。

17世紀中頃には、A類・C2類は存在しなくなるようで、京都系のみとなる。C3類の器形は、金沢城で出土する箱型と呼ばれる器形と類似しており、前田利長が富山城を仮住まいとした借城期に当たることから、金沢の影響が強く表れているのかもしれない。17世紀後半～18世紀前半には、底部が丸底化する。この器形変化も金沢での器形変化と類似している。

能登系土師器は第200図に示すようにほぼ全時期を通して、ごく少量ながら見受けられる。

法量 各時期の遺物総量に違いがあるため正確な傾向ではないと考えられるが、法量の変化についてみていく。

法量は、15世紀前半～17世紀前半にかけては多少の差異はあるものの大きな変化ではなく、概ね4つに分かれ。小皿は8～10cm、中皿は11～12cm、大皿は13～14cm、特大皿は15cm以上である。

15世紀代は小皿・中皿が中心で、15世紀後半は扁平なものが多い。16世紀初頭～前半になると小皿が急激な増加を見せ、全体の半数以上を占めるようになる。16世紀中頃には、ふたたび15世紀と同様に小皿・中皿が中心となる。16世紀後半になると大皿が増加し、小皿・中皿・大皿に量的な差異は無くなり、その傾向は17世紀前半まで続く。17世紀中頃～18世紀前半は、12～13cmの中皿がほとんどである。特大皿は全時期を通して、ごく少量ながら見受けられる。

5. おわりに

第199図で非ロクロの中近世土師器の編年を示したが、十分な検討を行えずにただ配置するに留まった。特に京都系土師器C類の細分化や内底面の圓線の有無などの製作技法の検討など多くの課題が残ったため、改めて検討したい。

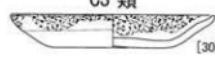
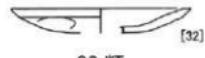
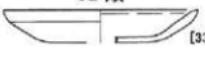
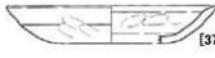
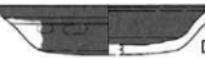
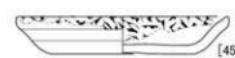
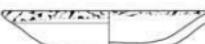
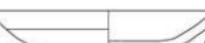
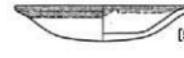
（堀内）

宮田 年代 前半 15C 3	(非口ク口)		
A類	[1]	B類	[2]
宮田IV 3	[3]	C1類	[4]-[6]
宮田V 5	[7]	[8]	[9]
[城址公園 2008 SK35-36]			
宮田VI 1	[10]	[11]	[12]-[16]
宮田VI 1	[13]	[15]	[17]
[城址 2007.9 SK705]			
宮田VI 2	[18]	[20]	[21]
宮田VI 2	[19]	[22]	[23]-[27]
[城址 H15-1T SK1]			
宮田VI 2	[23]	[25]	[28]
宮田VI 2	[24]	[26]	[28]
[城址 H15-1T SK54]			

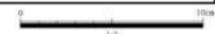
第198図 中近世土師器編年図(1)

※[]内は本図通し番号



宮田 年代	(非口クロ)
16 C 末 ~ 17 C 初頭	<p>A類</p>  <p>C3類</p>  <p>C1類</p>  <p>[14°-] MST 2-SD481</p>
16 C 末 ~ 17 C 初頭	<p>C2類</p>   <p>[34]</p>  <p>[36]</p> <p>[城址 2009-3T SK1]</p>
17 C 前半	   <p>[37]</p> <p>[38]</p> <p>[39]</p> <p>[城址 2008 SK6]</p>
17 C 中頃	  <p>[44]</p> <p>[45]</p> <p>[14°-] MST 4-SD686</p>
17 C 後半	    <p>[46]</p> <p>[48]</p> <p>[47]</p> <p>[49]</p> <p>[14°-] MST 4-SD666</p>
18 C 前半	    <p>[50]</p> <p>[51]</p> <p>[53]</p> <p>[52]</p> <p>[14°-] SK227</p>

※[]内は本図通し番号



	(能登系)	(ロクロ口)
15 C 前半 ～ 中頃	<p>[54] (レギー→スカサフ 2-SD70)</p>	
	<p>[55] (レギー→スカサフ 2-SD70)</p>	
15 C 後半		RA 類
	<p>[56] (レギー→スカサフ 3-SE77)</p>	<p>[58] (スカサフ SK35・36)</p>
	<p>[57] (レギー→スカサフ 2-SB470 古)</p>	<p>[59] (スカサフ SK35・36)</p>
16 C 初頭 ～ 前半	<p>[61] (スカサフ 3-SE121)</p>	
16 C 中頃		
16 C 後半	<p>[62] (レギー→スカサフ 3-SD54)</p>	
16 C 末 ～ 17 C 初頭	<p>[63] (レギー→スカサフ 2-SD481)</p>	<p>[64] (レギー→スカサフ 2-SB470 新)</p>
	<p>[65] (レギー→スカサフ 2-SB470 新)</p>	
17 C 前半		
17 C 中頃	<p>[66] (レギー→スカサフ 4-SD58)</p>	
17 C 後半	<p>[67] (レギー→スカサフ 4-SD60)</p>	

第199図 中近世土器編年図(2)

※[]内は本図通し番号

-370-



第5節 江戸時代後期の富山城三ノ丸内水溜状遺構について

1. 石組遺構の規模と構造

4区の大部分を占める大型の石組遺構は、水溜状遺構である。4区東側に位置する石組遺構全体を4-SX3・4、再構築と考えられる中央石組の北側に区画された石組遺構を4-SX3とした。石組遺構は木杭と胴木、石組等で区画されており、4-SX3・4の規模は長軸が約26m、短軸が調査区内で約9m（推定長約13m）、深さが約1.2mを測る。主軸方向はN-6°-Eである。石組遺構北東には石組水路4-SD13がある。4-SD13は石組遺構に向かって北から南へ勾配を持ち、連結部は調査区外のため確認できないものの、石組遺構に付設された取水溝の可能性が指摘できる。

4-SX3・4と平行して、約9m西側にも胴木・石組が存在し、こちらも水溜状遺構の可能性があり、4-SX77でしたが、大部分が調査区外に拡がるため、不明である。

また4-SX3・4南北軸の胴木のうち、中央の石組と接する部分が中央石組を境として途切れてしまはず、南にそのまま伸びていることも、4-SX3へと縮小再構築された可能性をうかがわせる。

2. 石組遺構の用途

石組遺構の用途は、重臣屋敷内に設置された防火水槽と考えられる。その根拠として、①部材である木杭・胴木等に腐敗がみられないことから當時溜水した環境にあった可能性が高く、②石組が内側への崩落を防ぐ構造であったことから内側に空間を持たせる構築目的と考えられること、③類似する遺構として、金沢城下町遺跡に公事場の防火水槽（3.3m×5.0m×深さ0.5～0.6m／第200図）と推定された水溜状遺構があること、が挙げられる。

3. 石組遺構の構築方法

構築過程は下記①～⑥である。（第202図）

- ①南北約26m×幅約9m以上×深さ1.2mの平面長方形の大型堅穴土坑を掘削する。
- ②防水性を高めるため、底面に粘質土を固く敷き固める。
- ③土坑外周壁際に2m前後の胴木を敷き、胴木両端部付近に約1.3～1.7m間隔で胴木止めの木杭を打ち込む。胴木どうしを相欠きで繋いで補強している箇所もある。
- ④胴木の上に細長い玉石3～4段を合端加工しながら谷積みし、裏込めに栗石などを入れ締め固める。最上段には、天端石として縦0.45～0.6m×横0.3～0.45m×高さ0.2～0.3mのやや大きい玉石を積む。
- ⑤湧水層まで導水用竹管を打設、の工程①～⑤であると考えられる。⑥については、遺構中央やや南側および南西端付近の底面に、垂直方向に刺さる竹管が確認でき、調査期間中、小量ながら當時水を湧出させており、湧水層から水を得るために設置されたと考えられる。
- ⑦の木杭上面は外側に向かって斜めとなるように打たれており、石組構造の内側への胴木・石の崩落を予防する目的があったと考えられる。⑦の木杭や胴木の一部には建築部材、⑧の石の一部には石垣石材が転用されていた。

石組の構築方法は、専門学校富山職藝学院の上野幸夫教授によれば、太田南町地内に所在する国重要文化財である浮田家の表門（天保5（1835）年建設）横の石垣の構築方法より古いとされる。また、18世紀前半の4-SX40を掘削していることから、4-SX3・4の構築時期は18世紀中頃と考えられる。

水溜状遺構の石組は、堅穴土坑の壁崩壊防止を目的として行っており、用排水を目的とした石組水路に比べ構造上の正確性を求められなかったためか、その石組構造は、第1期調査で検出した明治時代の石組水路に比べ、石組の作りが粗い。また構築年代の違いがその要因である可能性も考えられる。

4. 石組遺構内の埋土とその性質

石組遺構の埋土は、中央石組を境に南北で大きくその性質が異なる。北側の4-SX3部分の埋土は、

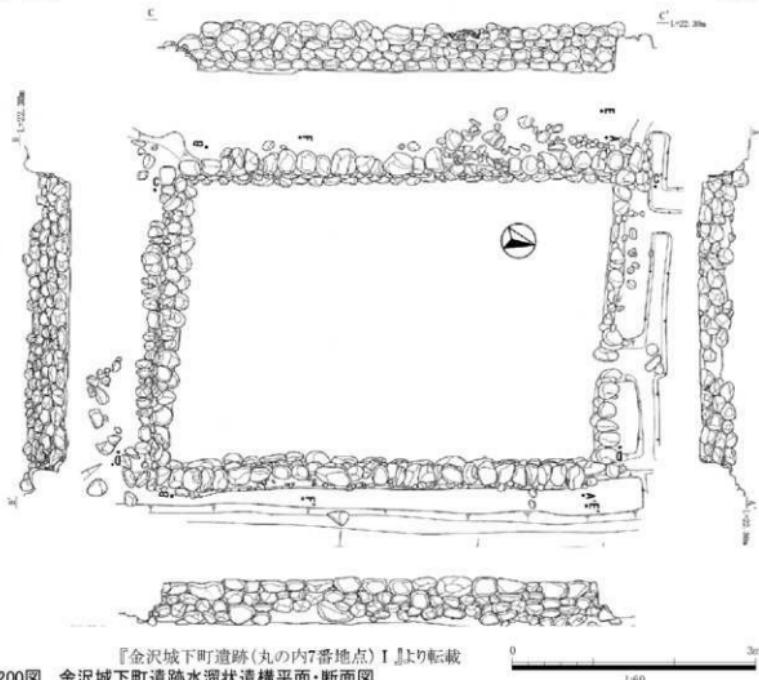
下部に黒褐色粘土質シルトが水平堆積し、上部は山砂が堆積する。下層部分は自然堆積、上層部分は19世紀以降、最終的な遺構廃棄時に埋め戻されたと考えられる。4-SX77も同様の堆積である。

4-SX3・4南半部分の埋土は、東壁断面観察の結果、上部には粗砂礫が数層堆積し、最底面には礫が混じる灰色砂質シルトが堆積し、固く縮まっている。その下に堆積する埋土は、より古い遺構の堀4-SD58の埋土である。埋土上部に堆積する粗砂礫は、自然科学分析の結果、洪水堆積層であることが分かった。この洪水は、記録上、三ノ丸まで及んだとされる寛政元（1789）年の洪水と推測される。この洪水により4-SX3・4は一度全体的に粗砂礫で埋没したが、北側を浚渫し、4-SX3を再構築した。4-SX3の再構築のために、南北で埋土の性質が異なっていると考えられる。

5. 中央の石組構造と縮小再構築（第201図）

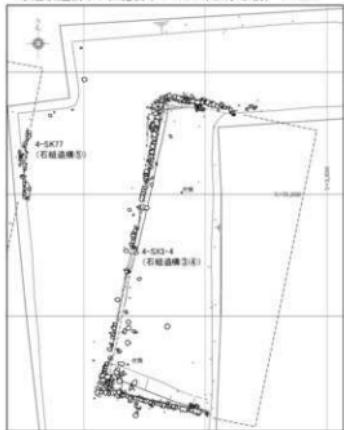
中央の石組は、4-SX3を再構築した際に積まれたものである。4-SX3部分を浚渫した後に底面にそのまま長さ4mを超える長い胴木を配して木杭で固定し、胴木の上に、北側に面をとるように自然石および転用石を3段程積み上げてある。しかし、丁寧に合端加工を行なながら1列に綺麗に並べて積んだ4-SX4の石組に比べ、中央石組は合端加工もせずに、最大3列に並んで積み上げていたりするなど簡易な石組を行なっている。これは、石組を丁寧に積んで再構築させることよりも、早急に再構築させることが優先したことが要因と考えられる。石組に使用した石材は4-SX4の石組より大きいものが多く、洪水時に崩れた天端石を転用したと推測される。

縮小して再構築が行われた理由は、調査結果から解明できなかった。いずれにせよ、縮小されたとはいえ、すぐに再構築された可能性が高い当施設は、当時の諸状況下で、重要な施設であった可能性が高い。



第200図 金沢城下町遺跡(丸の内7番地点) I』より転載
『金沢城下町遺跡水溜状遺構平面・断面図

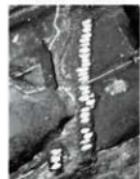
水溜状造構（18世紀後半：1789年洪水以前）1:400



石組水路・水溜状造構（18世紀末：1789年洪水以後）1:400



4-SD13 石組水路



石組構造（北側）南から



石組構造（中央）北から



石組構造（南側）北から



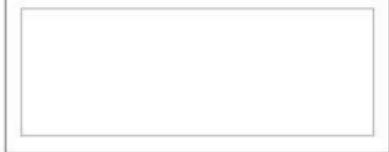
4-SX3・4 水溜状構造

第201図 水溜状造構関連施設の構造と変遷

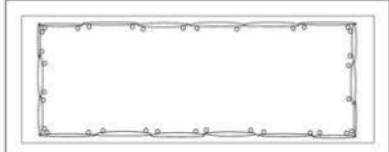
・構築区画の選定



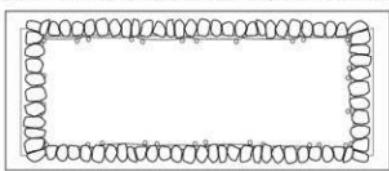
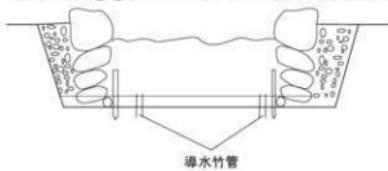
・構築過程①②大型豊穴状土坑掘削と粘質土による底面の敷き固め(漏水軽減目的)



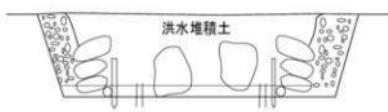
・構築過程③土坑外周内側に胴木と縦杭を設置



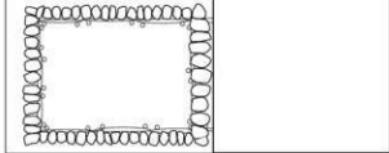
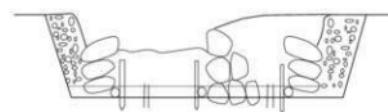
・構築過程④⑤組石と石組-外周壁間に礫を混ぜた粘質土による固定作業(完成) *導水竹管の打設



・洪水による埋没



・部分的な浚渫と再構築(完成) *4-SD13石組送水路の設置



第202図 水溜状遺構構築-再構築変遷模式図

参考文献（事実記載、総括）

- 愛知県史編纂委員会 2007『愛知県史』別編 中世・近世 漸戸系 窯業2
石川県金沢城調査研究所 2008『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書I』
石川県金沢城調査研究所編 2009『よみがえる金沢城2』石川県教育委員会
石川県金沢城調査研究所 2012『金沢城跡一二ノ丸内堀・菱櫓・五十間長屋・橋爪門統櫓II一』
石川県金沢城調査研究所 2014『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書II』
宇野隆夫 1982「井戸考」『史林』第65巻 史学研究会
宇野隆夫 1986『越中弓庄城跡の土師器－中世の北陸と畿内』『大境』第10号 富山考古学会
宇野隆夫 2001「中世莊園遺跡の諸相」『莊園の考古学』青木書店
江戸遺跡研究会編 1992『江戸の食文化』吉川弘文館
江戸遺跡研究会編 2001『図説 江戸考古学研究事典』柏書房
越前慎子 1996「梅原胡摩堂遺跡出土中世土師器皿の編年」『梅原胡摩堂遺跡発掘報告書』
公益財團法人富山県文化振興財团 埋蔵文化財調査事務所
小野正敏 1982「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿陶磁研究会
金沢市 2012『金沢城下町遺跡(本多町三丁目地点)』
金沢城研究調査室 2006『金沢城跡II』三ノ丸第1次調査
鐘方正樹 2003『井戸の考古学』同成社
金田章裕 1972『条里制』『小矢部市史 上巻』
九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』
久保尚文 1983「富山郷について」『越中中世史の研究』桂書房
久保尚文 1996「中世の柳町」『富山柳町のれきし』柳町郷土史刊行委員会
久保尚文 1999「富山郷・田中保関係文書について」『富山史壇』第130号 越中史壇会
久保尚文 2011「富山地方鉄道不二越線路線について」『近代史研究』第34号 富山近代史研究会
久保尚文 2014「京都東岩藏寺と富山郷－越中地域史研究の原点@ー』『富山史壇』第174号 越中史壇会
定塚武敏 1974「越中の焼きもの」『富山文庫』2 巧玄出版
酒井重洋 1997「中世土師器の分類について－清水島II遺跡・中名II遺跡・持田I遺跡から－」『埋蔵文化財 調査概要－平成8年度－』財團法人富山県文化振興財团埋蔵文化財事務所
瀬戸市史編纂委員会 1988『瀬戸市史陶磁史編』2
瀬戸市史編纂委員会 1993『瀬戸市史陶磁史編』5
瀬戸市史編纂委員会 1998『瀬戸市史陶磁史編』6
總曲輪通り南地区市街地再開発組合・富山市教育委員会 2006『富山城跡発掘調査報告書』
總曲輪四丁目・旅籠町地区開発協議会・富山市教育委員会 2010『富山城跡発掘調査報告書』
高梨清志 2006「富山県の様相」『中世北陸の中世土師器と輸入陶磁器・瀬戸美濃製品』北陸中世考古学研究会
多治見市教育委員会 1993『美濃窯の焼物』
富山市 1987『富山市史 通史上巻』
富山市 1987『富山市史 通史下巻』
富山市教育委員会 2004『富山城跡試掘確認調査報告書』
富山市教育委員会 2005『富山城跡発掘調査概要』
富山市教育委員会 2006『富山城跡試掘確認調査報告書』
富山市教育委員会 2006『富山城跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2007『富山城跡試掘確認調査報告書』
富山市教育委員会 2008『富山城跡試掘確認調査報告書』
富山市教育委員会 2009『富山城跡試掘確認調査報告書』
富山市教育委員会 2009『富山城跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2010『富山城跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2014『富山城下町遺跡主要部発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2014『平成26年度 富山城跡現地説明会資料』
富山市教育委員会 2015『富山城跡富山城下町遺跡主要部発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2015a『千石町遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2015b『富山城跡・富山城下町遺跡主要部発掘調査報告書』

- 富山市教育委員会 2016 『富山城跡発掘調査報告書一城址公園整備工事に伴う埋蔵文財発掘調査報告書(1)』
- 富山市教育委員会 2016 『富山城跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2017a 『富山城跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2017b 『富山城跡発掘調査報告書』
- 富山市郷土博物館 2005 『富山城ものがたり』
- 富山市郷土博物館 2015 『特別展 都市“富山”の四〇〇年』
- 富山市路面電車推進室・富山市教育委員会 2009 『富山城跡発掘調査報告書』
- 西町南地区市街地再開発組合・富山市教育委員会 2014 『富山城下町遺跡主要部発掘調査報告書』
- 野垣好史 2016 『考古学の成果からみた富山城下町の形成・変容』『中近世移行期 前田家領国における城下町と権力』一加賀・能登・越中一』 城下町科研・金沢研究集会実行委員会
- 福井県教育厅埋蔵文化財調査センター 2016 『越前焼総合調査事業報告』
- 古川知明 2014 『富山城の繩張と城下町の構造』桂書房
- 細川武穂 2010 『東岩藏寺と宝町幕府』『京都の寺社と室町幕府』
- 堀内大介 2017 『近世土師器皿・越中瀬戸素焼皿の集成～富山城跡・富山城下町遺跡主要部の出土遺物から～』『富山市考古資料館紀要』第36号 富山市考古資料館
- 宮田進一 1988 『越中瀬戸の窯資料1』『大鏡』第12号 富山考古学学会
- 宮田進一 1998 『第4節 越中瀬戸の変遷と分布』『中・近世の北陸』 桂書房
- 宮田進一 1992 『越中における中世土器の編年』『中世前期の土器・陶磁器・漆器』北陸中世土器研究会
- 宮田進一 1997 『越中における土師器の編年』『中・近世の北陸－考古学が語る社会史』北陸中世土器研究会
- 森 隆 2003 『富山県の中世土器（資料編）』『富山考古学研究』第6号 財団法人富山県文化振興財团埋蔵文化財事務所
- 森 隆 2005 『富山県の中世土器（資料編2）』『富山考古学研究』第8号 財団法人富山県文化振興財团埋蔵文化財事務所
- 山室郷土史刊行委員会 1993 『山室郷土史』
- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館
- 四柳嘉章 1991 『古代～近世漆器の変遷と塗装技術』『石川考古学研究会之誌』第34号石川考古学研究会
- 四柳嘉章 1992 『北陸漆器研究の成果と課題』『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』北陸中世土器研究会
- 四柳嘉章 2006 『漆』I、II 法政大学出版会

報告書抄録

ふりがな	とやまじょうあとはづつちょうさほくこく							
書名	富山城跡発掘調査報告							
副書名	総曲輪レガートスクエア整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(2)							
シリーズ名	富山市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	93							
編著者名	堀内大介・納屋内高史(富山市教育委員会埋蔵文化財センター) 朝田要一・朝日奈子(北陸航測株式会社)・中村晋也(金沢学院大学) 野口真利江・森利志・伊藤茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一・Zaur Lomtadze・ 小林克也(株式会社パレオ・ラボ) 株式会社吉田生物研究所							
編集機関	北陸航測株式会社							
編集機関住所	〒933-0353 富山県高岡市麻生谷400 TEL0766-31-6033							
発行機関	富山市教育委員会 埋蔵文化財センター							
発行機関所在地	〒939-2798 富山県富山市婦中町速星754 緯中行政サービスセンター3F TEL076-465-2146							
発行年月日	西暦2018年3月30日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
富山城跡	富山市総曲輪 四丁目地内	16201	2010442	36 度 41 分 31 秒	137 度 12 分 39 秒	(第2期調査) 20150508～ 20151116	3,565.5 m ²	総曲輪 レガート スクエア 整備
						(第3期調査) 20160412～ 20160720	704.86 m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
富山城跡	散布地	弥生	－	弥生土器				
	散布地	古代	－	須恵器、土師器				
	集落	室町	堀、区画溝、溝、井戸、土坑	中世土師器、珠洲、瀬戸美濃、中国青磁、青白磁(梅瓶)	中世莊園「富山郷」の遺構や、武家居館の堀を確認			
	城館	戦国	堀、区画溝、溝、井戸、土坑、ピット、櫓列、掘建柱建物	中世土師器、瀬戸美濃、越前、中国陶磁器(青磁・白磁)、木製品(漆器、箸、木札、井戸側板等)、土製品(土鍤)、石製品(硯、砥石、石臼等)、石造物(五輪塔、宝篋印塔等)、鍛冶関連遺物(取鉢)等	中世富山城期の堀や、複数のかわらけ廐裏土坑等を確認			
	城館	江戸	堀、区画溝、溝、井戸、土坑、ピット、水溜状構、馬屋、櫓列	近世土師器、瀬戸美濃、京・信楽系、越前、中国陶磁器(白磁・璋州窯染付)、肥前陶磁器(唐津、伊万里)、越中瀬戸、木製品(下駄、漆器、箸、木札、井戸側板等)、土製品(土鍤、形、金属製品(簪、古錢等)、骨角製品(嵌縫用ヘラ)、石製品(基石、硯、砥石、石臼等)、石造物(板碑・五輪塔等)、石垣石材	近世富山城三ノ丸内の武家屋敷地の変遷や、18世紀の整地跡、結園にある馬屋、防火水槽と考えられる水溜状遺構等の遺構を確認			
	集落	近代(明治)	溝、土坑	近代陶磁器、不明金属製品、木製品(富山地方裁判所木札等)	三ノ丸に設置された富山地方裁判所閑連遺物が出土			

要約

本調査区は富山藩の重臣屋敷があつた富山城三ノ丸南西部の調査である。調査の結果、三ノ丸となる以前にも室町時代・戦国時代の遺構が広がつておる。中世荘園「富山郷」の集落から富山城三ノ丸の近世城郭への変遷が明らかとなつた。

室町時代の区画溝は『古見詮額寄進状』(応永5(1398)年)が記された時期と一致することから、中世荘園「富山郷」の遺構と考えられると同時に、富山郷にはN-10 ~ 12°-Eを主軸とする条里地割が施工されていたことが分かつた。室町時代や戦国時代の溝・堀、重複する近世の区画溝、慶長期富山城外堀が富山郷の条里地割と同じ主軸方向を持つことから、条里地割が割譲されていたと考えられる。

調査区中央で16世紀前半の武家居館の塗を検出した。調査区南北端で中世富山城の塗であつた可能性がある16世紀後半~17世紀初頭の塗を検出し、塗の範囲が本調査区まで拡がつていたことが考えられる。また、居館や曲輪内部で行われた宴会の片付け痕跡と考えられる16世紀代のかまらけ廃棄土坑を複数検出した。

江戸時代の廃棄土坑や井戸等からは大量の陶磁器類が出土しており、重臣屋敷での陶磁器の使用状況が分かる好資料と言える。

多発する火事への対策として18世紀に構築された石組の水溜状遺構を検出するとともに、洪水による理没と縮小再開削の変遷を確認した。また、調査区南東で江戸時代後期の絵図に描かれる馬場にあったと考えられる馬屋を検出した。

調査区全体の出土遺物の観察結果は下記のとおりである。①中世の遺構の主体を成すのは珠洲衰退後の16世紀であることから、中世を代表する調理具・貯蔵具である珠洲が極めて少なく、越前が多い。②16世紀末の越中瀬戸窯の成立と流通を境に、土師器皿の生産が漸減し、越中瀬戸素焼皿が17世紀末~18世紀前半に向けて急増する。③16世紀末~17世紀中頃に輸入され流通した、粗製の中国漳州窯染付が一定量出土する。④富山城下町遺跡と同様、18世紀前半には越中瀬戸・唐津等とともに、京・信楽系の供耕具が一定量搬入し、使用される。

富山市埋蔵文化財調査報告93

富山城跡発掘調査報告書

- 総曲輪レガートスクエア整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(2) -

発行日 2018(平成30)年3月30日

編 集 北陸航測株式会社

発 行 富山市教育委員会 埋蔵文化財センター

〒939-2798 富山県富山市婦中町速星754番地

婦中行政サービスセンター3階

TEL 076-465-2146 FAX 076-465-5032

印 刷 株式会社トーザワ